
ノスタルジア・エンドロール——亡国再興記——【改訂版】

葵 大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノスタルジア・エンドロール——亡国再興記——【改訂版】

【Nコード】

N0303Y

【作者名】

葵 大和

【あらすじ】

戦争の果てに世界の地図から消えた王国が在った。仇国に領地も資源も搾取される日々の中、未だに王国再興の精神を体现する者が居た。最後の血族、没落王国の王子だった。追憶を抱き続ける亡霊の叫びは世界に再び響くのか。陰謀渦巻く歴史の螺旋の中、王子は何を為す。

剣と魔法のファンタジー世界。戦記の要素を多く含みます。準最強系の主人公です。多少のご都合主義的な側面が見られる事が御座いますので、苦手な方は御注意願います。

1話 「境界で亡霊は叫ぶ」

第三次レザール戦争。

世界でも数国しか存在しない完全な独立国家エスクード王国と、大々的な物品流通の国際基盤を持つマズール王国との鉱山資源を賭けた争い。レザール鉱山は丁度二国間の国境線に頂を貫かせており、かねてから所有権の譲渡をかけて争ってはいたが、第三次レザール戦争は其中で最も熾烈を期した。事実、三度に及ぶ戦争はそこで終結し、多量の人命を犠牲にしてマズールが所有権を獲得、公に鉱山資源を搾取できる時代が訪れた。

第一次、第二次には両者の軍力は拮抗していたものの、第三次に臨むにあたり、マズール王国は戦力の増築を目的に或る協定連合への加入に踏み切っていた。加入国の相互交流円滑化を理念とし、無条件国境踏破法案、相互関税廃止、その他にもおよそ国の相違をあやふやにする規定を暗黙の了解とする協定連合群——《ヴァンガード》。

貴重な鉱山の奪取とあらば連合国家は無条件に軍力を貸し、結果マズールは虐殺に近い形でエスクードを下した。

一方のエスクードは完全独立国家である。

他国との貿易はするものの、根本では他国を拒絶し、中立を維持、他国間の戦争にも一切の干渉をしないという名目で自立していた。しかし、独自に自衛力を育てていた為、一方的な武力介入にも動じず、退かず、その土地を守り抜いてきた。

限界だったのかもしれない。

エスクードの土地は鉱山や天然資源に溢れており、他国から見れば貴重な資源を独占しているように見える。交易でその資源を平等に取引してはいたが、世界から独立しているという確固たる真実が裏で他国を刺激していた。

滅亡は目に見えていた。

ヴァンガード協定連合を後ろ盾にエスクードへ侵攻したマズールは武力という点において驚異的なまでの成長を遂げ、もはやエスクードには立ち討つ術はなく、狭い土地に住む国民を逃がすことしかできなかった。

そしてエスクード王国は滅びた。世界の地図から、エスクード王国は崩れ去り、消え失せた。

現在に語られる所の亡国エスクードの誕生である。
同種族間の戦争は哀しい物だ。

人間は何処まで愚かなのだろうか。

『レザール戦争の軌跡』著…イース・マグナ 天暦3305年

神は信じない。信ずるは己の叫び。

旧エスクード領——現マズール領・ヴァンガード協定連合法下。

「エスクード王の敷いた善政も：あくまではエスクード国民にとっての善政であって他国には悪政にしか見えなかったのかもな——」

マズール王国の檻が伸びていない田舎村の古びたレンガの家の中で、一人の青年が膝元に一冊の本を置きながら言葉を紡いだ。きめ細かな白い肌、日光を受けて煌めく長い銀髪は、彼の背元で無造作に黒い紐によって纏められている。目元に掛かる前髪の隙間からは、

深い真紅に彩られた瞳が覗いていた。一目見れば、誰もが超俗的な印象を得ずには居られない特異な容姿。青年は、目元に掛かる前髪を少し指でどかしながら、台所で家事に勤しむ一人の少女に視線を送った。

少女は彼の視線を小さく細い背中で受け、その視線に込められた言葉に気付いて振り向いた。

「私の意見を聞きたいの？」

「まあ——そんな所だ」

彼女は首元から掛けていたエプロンを解きながら、台所を離れて青年の居るリビングのテーブルへと歩を進める。青年以上に長く伸びた金糸の髪は、一片の汚れもなく、澄んだ輝きを放っていた。女性にしては背は高い方で、整った目鼻立ち、すらりと伸びる細い四肢、透き通るような白い肌、仕草の一つ一つには独特の高貴さと無邪気さが混ざり合っている。通りすがりの男性が見れば、一たびに魅了されかねないような容姿と、流麗さを伴う動きで彼の横に椅子を持ってきて、彼の手の中の本を覗きこむように座り込んだ。顎元にまで伸びる長い金髪を、指で耳元に掛けながら、本に書かれた文字に目を通していく。

「政治の本？」

「端的に言うならな。リリアーナにはまだ早かったか？」

「馬鹿にしてる？」

彼女は目元に少し力を入れて、ありったけの鋭い視線を上目遣いで彼に送った。

「はは、そう怒るなよ。それで、さっきの話だけど——」

青年は端正な顔に微笑を浮かべ、彼女の視線に応えた。

「そんなの、誰も判断出来ないと思う。だって、人にはそれぞれ違う価値観があるから——」

彼女の口から出たのは、答えを保留しているような、同時に、酷く世界を達観しているような言葉だった。

「正に。それでも、世界は、人は、単一の秩序を欲している。少なくとも。でなければ戦争なんて起きないさ」

青年は幾許かの寂寥感を瞳に灯し、力無い微笑を湛えた。少女は青年を心配そうな視線で見つめるが、彼の瞳は彼女ではなく、自らの内側に向いているようだった。自分の内側に答えを模索しているような——

彼の手も足も、表情も止まり、ただ瞳だけが瑞々しげに時折閃いている。

彼女は、不意に彼がそのまま何処かへ行ってしまうような気がして、咄嗟に彼の名を呼んだ。

「《ユーリ》」

青年はその言葉に反応して、一度瞬きをすると、自分の名を呼んだ彼女の顔に視線を向けた。丁度その頃、台所で炊きつけていた鍋がぐつぐつと大きな音を立て始めて、彼女は少し焦燥を含んだ声を上げて、台所へ駆けていく。

「焦げる焦げるー!」

その様子を微笑ましげに後ろから眺めていた青年は、彼女が煮え

たぎる鍋と格闘している間に膝もとの本を畳み、部屋の隅に置かれた大きめの本棚に戻した。そのままの足で、彼女の元まで歩み、細い指を彼女の金糸の髪に絡めて、一度彼女の頭を撫でた。

「少し外を歩いて来るよ、《リリアーヌ》」

「うん、気をつけてね」

この平和な村で気をつける事なんかないよ、と青年は返して、レンガ作りの家を出て行った。



村から少し離れた場所にある丘を目指す。辺りはからは日中の仕事を終えた村人たちの声が度々聞こえ、ささやかな活気に満ちていた。すれ違う村人たちに笑顔で挨拶をしつつ、ユーリはただ歩き続ける。

考え事があると、旧エスクード領がよく見えるこの丘に来るようになった。別段、特別な場所であるという訳でもなく、ただ単に静かで、景色がよく見えるから。考え事するには適しているのかもしれない。

「どうせ——答えは出ないのに、何故こうも考え続ける」

先の事なんて実際に出会ってみなければ解らないのに、と付け加え、自分に言い聞かせるように言葉を紡いだ。丘の最上部まで昇り切り、その場に腰を下ろす。沈み始めた日の光が、同じような赤みを漂うわせるユーリの瞳をそれ以上に赤く彩った。

同じ輪廻を廻る思考が終着点に至る訳でもなく、しかし、その螺旋の思考を忘れられる程の別の思考が生まれる訳でもなく。

日が半分以上地平線に隠れ、地に注ぐ光もまばらになってきた頃、

ようやくユーリは丘から立ち上がり、リリアーナの待つ家へ帰ろうと決心した。

こんな一日を一体幾度重ね続けてきたのだろうか。纏まらない考えと、定まらない決意に振り回されながら、この身をその場で漂わせる。

何時までもこの思索の日々が続く訳ではないと解っているのに――

ふと脳裏に過る文字の羅列。嗚呼、その通りだよ、と自分ではない誰かに語りかけるかのように、ユーリは帰り際に呟いた。



丘から村の中に戻ってきた頃には、辺りは暗く、村の中に点々と立ち並ぶ街灯の光だけが村の中を静かに照らしていた。思いのほか遅くなってしまった物だ、と思ったよりも時間を長く費やしてしまった自分を少し叱咤し、足早にリリアーナの待つ自分の家へと歩んでいく。

遂に家が見えた頃には、周辺から唾液をそそる様な良い香りがして、都合よく空腹を主張する胃袋を宥めつつ、家の扉を開けて声を上げた。

「ただ今、リリィ」

「あ、御帰り、ユーリ。あんまり遅いから私が全部食べちゃおうかと思ってた所だったよ……」

「悪かったって――」

リリアーナは少し頬を蒸気させてユーリの非を主張する。大人しく彼女に謝罪の言葉を送り、そのままリビングの椅子に腰かけた。

彼女の作る料理の数々は、商品として出しても遜色ないと思われる程に美味で、いつもながら、彼女のこういった手腕の良さに若干の驚嘆を抱きつつも、止まらない手でその料理の数々を口元に持っていく。

対するリリアーナは一向に止まる気配がない彼のナイフとフォークに若干の畏怖を抱きつつも、満足げに言葉を紡いだ。

「ホントよく食べるよね：ユーリって。作りがいはあるけど——」
「ん？」

「——食材費の事も少しは考えて欲しいな？」

「まだ蓄えはあるじゃないか」

「食べながら喋らないの」

「ふあい」

喋りかけたのはリリィの方じゃないか、と心の中で言うが、ユーリは彼女の言葉に大人しく従って一度適当に返事をしてからとりあえず口の中の物を飲みこんだ。

「ユーリって品行さえ整えれば高貴な人に見えなくもないのに：」

「品行方正なリリアーナ様に言われると弁解のしようも御座いませんよ」

冗談めいた口調で、リリアーナの小言を適当にいなしつつ、ユーリは再び口に料理を運び始める。しかし、鶏肉のソテーを口元にフォークで持ってきた所で、リリアーナの些細な挙動の変化に気付いた。

リリアーナの耳が、ピクリと一度だけ脈打った。常人よりも幾許か長く、少しだけ尖がった細い耳が。

口元まで持ってきた鶏肉を一度料理皿に戻し、真剣な顔で彼女に

問う。

「どうした？」

「音：聞き慣れない音がする——」

ユーリも耳を^{そばだ}敬てるが、特に変わった音は聞こえない。しかし、ユーリはリリアーナの言葉を全面的に肯定していた。彼女が言うのだから、何か異変が起きている、と。ユーリはナイフとフォークを静かにテーブルに置き、椅子から立ち上がる。

「リリィは此処に居ろ。俺が外の様子を見てくる」

リリアーナは未だに眼を瞑って意識を聴覚に集中させている。彼女が聞いた音を、より明確に聞き取るために。

しかし、次の瞬間——ユーリでさえも聞きとれる程の『怒号』が村の中で響いた。ユーリの顔から穏やかさが消え失せる。確実な異変。確信——

ユーリが家から飛び出そうとした所で、リリアーナが咄嗟に声を上げた。

「待って！ 私も連れて行って！」

初めは断ろうと思った。しかし、彼女の怯えるような瞳を見て、彼女を此処に置いて行くべきではないと判断したユーリが直ぐに答えた。

「解った——手を離すなよ」

ユーリはリリアーナの手を取り、家の扉を開け、彼女の歩幅に合わせてつつも、出来るだけ急いで怒号の出所へ走って行く。

走っている最中、不意にユーリの脳裏にまた文字の羅列が浮かんだ。

決意の刻が来た——と。

怒号の発信地に近づけ近づく程に、怒号は確かな言葉の繋がりとなってその意味を報せていく。村人の声、聞き慣れた声だった。

「近いな」

そして——『現場』に着いた時、ユーリは愕然とした。



「てめえ！よくも！」

豪勢な髭を蓄えた村大工の一人が怒りの籠った声を上げている。何度か世話になった事もあるその村大工にはユーリも当然見覚えがあった。しかし——もう一方。その村大工の男が怒声を投げかけている相手。

見慣れぬ鎧姿の騎士である。

一、二、三、……多すぎる。これでは騎士団だ。そうユーリは心の中で冷静に呟いた。騎士達の鎧甲冑には《マズール王国》の紋章——鷲の翼と上半身に、獅子の下半身を持つ《グリフォン》の肖像——が彫られている。

ユーリの頭はその紋章を見て即座に、彼らが何者であるかを弾き出した。

何故マズール騎士団がこんな田舎の村に——

そう考えている最中——ユーリの体は咄嗟に動いていた。

怒声を放っていた村大工が、不意に剣を抜き去った騎士の斬撃をまともに受けたからだった。

不味い、致命傷だ、と眼の前の光景を見て村大工の傷の深さを的確に判断する。

「——！」

「喋るな！」

内臓の損傷によって、口元から鮮血の泡を垂らしながらも、村大工は何かを言おうとしている。ユーリはそれを止めようとするが、怒りに支配されている村大工の方は一向に大人しくなる気配がない。しかし、傷の深さも相当で、徐々に声を出す事も辛くなってきたのか、その村大工は遂に喋る事を止めて、一挙手で全てをユーリに伝えた。彼の指さす先。

血に伏す老婆。

ユーリがその姿を見つけた時、ユーリの前に村大工を斬り捨てた騎士が歩み寄ってきて口を開いた。

「我らは《マズール王国》よりこの村の『管理』を任された。此処からでは少し遠いが、十数キロ先に新たな鉱山が発掘され、その労働資源としてこの村の住人を使う予定だ。村にいるのはマズール領において納税すらしていない村民達だ——マズール王国に仕える事が出来るだけ有り難く思え。年老いた者は労働資源として使い物にならない故、切り捨てることになっている。これは報いだ。《エスクード王国》などという幻想に囚われつづけ、新国家への忠誠を忘れた者達よ。せめて幾許かでも…マズールを想うがいい」

ユーリはその言葉を聞いて、状況を掴む。掴まざるを得ない。その行動の結果を、目の前に提示されているのだから。だが、納得など出来ない。騎士の発した言葉はユーリにとって余りに理解に容易い言葉だった。エスクード王国とマズール王国。相容れない二つの国。その辿ってきた軌跡を、ユーリは理解し過ぎていた。

騒ぎに駆け付けた村人たちは、啞然として立ちつくしていた。

その騎士が、駆けつけた村人たちをぐるりと見回していく。そしてその視線はある一点で止まった。騎士はリリアーナを見ていた。容易く人目を引く美貌を持つ彼女。目立たない訳がない。

ユーリが村大工を優しく村人たちの側へ寝かせ、凝視に晒されるリリアーナの元へ戻ろうと思った時だった。血の匂いで思考が緩んでいる隙――ユーリが不味いと勘付くより早く、騎士は驚愕の声を並べていた。

「エルフ――何故こんな所に《エルフ》がいる！」

騎士が物騒な目つきで腰の鞘から剣を再び抜き去る。ずかずかと周りの村人たちを剣で追い払い、リリアーナの眼の前まで歩んでいく。殺意の籠った視線に晒され、リリアーナは一步も動く事が出来なかった。きっと彼は私を殺すのだろうという確信。それ程までの殺意の視線。そんな確信を抱きつつも、彼女は言う事を聞かない手足に諦観を抱く事しか出来なかった。

「貴様達は何を考えているのだ！エルフは人間の敵だぞ！一体何人がエルフに殺されたと思っている！何故殺さない！《グラン聖戦》の記憶を忘れ去ったか！」

騎士は歩を緩めることなくリリアーナに近づき、彼女の眼の前で止まると周りの村人たちにそう告げた。村人たちは反応できない。彼らにとって、グラン聖戦という言葉は違う意味を持っていたから。

「エスクード人め：やはりエルフと繋がっていたか！マズール領に於いて仇敵であるエルフを匿う事は重罪である。貴様らの処遇は後々伝えるにしても、今この場でエルフが生き永らえる事は許されない――」

騎士は剣を振り上げていた。月光を反射する剣を、ただ茫然と見つめるリリアーナ。そして――騎士の振り下ろした剣がリリアーナの脳天に迫っていった。

が――剣がリリアーナを切り裂くより早く、ユーリがリリアーナの元に走り出でて、彼女を庇った。倒れこむようにリリアーナを抱きかかえ、一振りの斬撃から彼女を守る。

自分の剣が空を切った事に気付いた騎士は、リリアーナを庇ったユーリに対して怒りの籠った声を上げた。

「貴様：何故エルフを庇う。忌まわしい『戦乱の記憶』を忘れたか！そのエルフを生かしておけばまた人間が殺される！どれ程の同胞が死んだと思っている！今すぐ殺せ！そのエルフを！殺さぬならばそこをどけ！」

「断る！」

「ならば貴様ごと――！」

ユーリは真っ向から騎士に反抗の意を示した。騎士はその言葉を受け、ユーリもろとも切り捨てようと剣を大きく上段に構えた。

リリアーナは怯え、ユーリの服の裾を握りしめたまま凍った。美麗な顔が恐怖に歪む。

騎士が剣を振り下ろさんと柄を握る両手に力を込め――

体は無意識の内に反応した。

身に刻まれた『戦乱の記憶』が呼び覚まされる。

不意に、ユーリの真紅の両眼の片方——右眼が金色に輝きを変え、同時に、ユーリの左掌から光が洩れる。

そして——右手が左掌から『何かを引き抜いた』。それは剣。儀礼用と思えるまでの美しい装飾が施された——剣。

「何ッ!？」

驚愕の声。それが騎士の最期の言葉だった。

振り下ろされる騎士の剣を凄まじい剣速の横一閃で弾き飛ばし、即座に上段刺突の構え。顔の横で刃が閃いた。その状態から、一寸も待たずして繰り出された猛烈な速度の刺突。剣を弾き飛ばされ、状態を崩した騎士に為す術はなく——

騎士の心臓を貫く剣は流れ出る赤に染まり、尚も閃く。

ユーリの手には『馴染み深い感触』が伝わって来ていた。

死の感触。

生気が枯渇していく、否、生気を吸い取って行くかのような。嫌な感慨に更ける。剣を騎士の体から引き抜いて一度振り、その刀身から血を払うユーリ。倒れた騎士を一瞥し、不気味な金と紅の三白眼を後列の騎士たちに向ける。突然の出来事に、他の騎士達は一瞬怯んだが、直ぐに状況を理解したようで隊列を組んでユーリと相対した。

「リリィ、下がっている」

怯えきったリリィを手で促す。彼女はようやく掴んでいたユーリの服を放して少し後ろへ下がった。

「貴様、自分が何をしたか解っているのか？」

若干震えている声で、ユーリに問う後列の騎士が一人。それは怒りによる震えなのか、怯えによる震えなのか。ユーリはそれに対して何かを言おうと口を少し開いたが、直ぐにそれを閉じた。言葉を発している騎士のさらに後ろから、剣を振りかざして走ってくる人影が三つ。ユーリは即座に剣を構え直し、迎撃態勢に移る。

まず一人、突っ込んできた騎士が剣を振り下ろすより速く、瞬間的な加速で真正面から懷に潜り込み、袈裟に切り払う。刀身を切り返し、二人目を横になぎ払った。そのまま三人目に斬りかかろうとしたところで、ユーリの視界の端で奇妙な光が点滅する。後列で待機していた騎士の仕業だった。騎士と言えども剣は持ち合わせていないその男が両手で包み込むように抱えていた物は――人の頭大の『炎の塊』だった。ちかちかと明滅し、燃え盛る炎の塊。その騎士の足元には光り輝く幾何学模様とルーン文字列――《魔術式》が描かれていた。

「魔術師か――」

魔術師に視線を一瞬移し変えている内に、眼前に迫っていた三人目の騎士の斬撃を、ユーリは軽業師のような軽快な後宙返りで避け、着地と同時に加速、斬り抜ける。背中を纏められた銀髪の一房が宙を舞った。そこで、遂に後列の魔術師が動く。両手に包んでいた炎の塊は一気に巨大化し、魔術師が炎の塊を前方に打ち出した。ユーリに向かって飛翔してくる炎弾は、その射程内の大気をちりちりと燃やしながら、遂にはユーリの視界の大半を遮る。

ユーリに慌てる様子はなかった。

剣を片手で握り、もう片方の掌を炎に向けて伸ばし、開く。

ただ、その掌で受け止めるように。

すると炎に向けた掌から巨大な魔法陣が瞬時に広がり、飛んでき

た炎弾を受け止めた。弾けるような音を放ちながら、ユーリの掌から広がる魔法陣と炎弾がぶつかり合う。鏖迫り合いのような衝突が少しの間続くが、ついに炎弾の方が急激に推進力と火力を失い、分散する。消えそうになりながらそれぞれが進路をずらし、宙で掻き消えて行った。

炎弾を飛ばした魔術師が驚愕の表情を浮かべた。

「無詠唱魔術で私の魔術を受け止めるなど――」

ユーリは炎を受け止め終わると即座に走り出し、無防備な後列の魔術師に飛びかかる。他の騎士が剣を抜き、魔術師を守る様に進路を変えるが、凄まじい速力を誇るユーリに追いつく事が出来ない。そしてユーリの剣が魔術師の首を切り飛ばした。

たった数十秒の戦闘だった。

一対多数の戦闘は、当初虐殺に近い物になるであろうと思われた。だが、あるうことか圧倒的な力量差を見せつけたのは一人の方。

驚愕の表情のまま宙を舞った魔術師の首が無残にも鈍い音を立てて地面に堕ちる。

それ以上ユーリに向かってくる者はいなかった。

生き残った数人の騎士が、その光景を見て畏怖によって硬直した手足を必死に動かして撤退を始める。その時、離れていく騎士に聞こえるように大声でユーリは叫んでいた。

「刻め！そして王に伝えろ！我が名は――」

旧エスクード王国第一王位継承権所持者。ユーリ・ロード・エスクードマズール王国に滅ぼされたエスクード王国の末裔である、と。

ユーリの胸には決意が浮かんでいた。

亡国の亡霊は叫ぶ。

その存在を世界に報せるように。

必死に、力強く――

2話 「代償は傷痕に残る」

旧エスクード王、つまるところシャル・デルニエ・エスクードは青年期、王室関係者であるというのに傭兵として過ごした日々があったと言う。

青年期の彼を知る傭兵仲間の話では、ある戦争では英雄と呼ばれ、ある戦争では戦神と呼ばれるほどの人物だったらしい。

武芸に優れているのは二つ名から容易に想像できるものの、また他の参考人からはまるで戦神という言葉からかけ離れている話を聞いた。

彼は戦中に、何人もの『敵』を救ったらしい。エルフと人間が大大的に対立した《グラン聖戦》では、エルフが人間の物量に圧され、撤退を始めた頃にエルフ陣営の最後尾に表れると、たった一人で人間軍の追走戦を退けたという。人間軍も摩耗していた事に変わりはないが、それでも尚、その追走を退ける事が出来たのは、違う事なき戦神の力があってこそ。何より、世界一般的にエルフを狩るべき立場にある人間が、同じ人間の前に立ちほだかるのは並大抵の精神力では出来ない。同じ人間を敵に回す可能性すらあるのだ。

ともかく、不思議な人物であることに変わりはないが、どこか愛着の湧く人物像である。それは勿論、私自身がエルフ支持を主張しているからだ――

彼が正式に王位を継承し、エスクード王となつてからもヴァンガード協定連合には加入せず、世界地図の位置からして西方の辺境地で独立国家を守り続けた彼は変わり者と言えるのかもしれない。

周辺各国から独立状態を維持しながらも、繁栄を期していたレザール戦争前のエスクードには何か後ろ盾のようなものがあったのか。私の推論ではエルフが関係している気がする。根拠は殆どない。しかし、エルフを救ったという噂話がある以上、そう思わざるを得ないのも事実だ。

——確たる証拠もなく論述をするのは些か不格好ではあるが、此処に私は明言して置く。

今ではエスクード王は死に、国すらも崩壊してマズールに取り込まれた状態だ。あの虐殺の中でエスクード陣営の要人が生き延びたとは思えない。エスクード王には一人息子がいたと言われているが、彼も生きてはいないだろう。

レザール戦争下でたった一人生きていたと言うなら息子は修羅になっっているかもしれない。

いや、仮定で話を進めるならエルフからなんらかの助力があった可能性も捨てきれないか。

私個人としては、かの英雄の息子が生きていることを切に願っている。

こんなことを言っていればおそらく私もマズールに目を付けられるだろう。

だが、この時代の印が後世に残ることを強く望む。

『エスクード考察記・下』著…グステンシュタイン・マードグ 天歴3307年



一夜明け。

騎士に切り伏せられた村大工は死んだ。十分な医術が整っていないこの辺境の田舎村ではやりように限りがあった。

そして——村大工と老婆の弔いが、次の日に行われた。

簡易的な墓の前に集まる村人。そこにユーリとリリアヌの姿もあった。言葉数は少なく、無言に近い中、ただ鎮魂歌^{レクイエム}を謡う幼い子供たちの声とその場に残響した。

鎮魂歌が止み、一人ずつぽつぽつと村人が去って行く中、何人か

の村人だけが残り、同様にその場で立ち竦んでいたユーリとリリアーナに声を掛けた。

「これから…どうなさるのですか」

ユーリが自らの正体、身分を公表した以上、旧エスクード人である村人たちは敬意を含む言葉で問いかける。それに対してユーリは静かな無表情を湛えたまま、答える。

「リリアーナと共に村を出ます。俺達がいる以上、この村は狙われ続ける。――いや、もう遅いのもかもしれない。多大な迷惑をかけたことをお詫びします」

神妙な顔つきのユーリを見て、村人たちは涙を流した。

村人が二人も居なくなった事、エスクード王国の最後の希望が生きていた事、その王子が、自分を責めている事。諸々を含めて、複雑な涙を流す。

「貴方様がまた流浪の旅へ出なければならぬのは心苦しいことです。どうか貴方に竜族の御加護がありますように」

竜族――旧エスクード王国の紋章である。普段ならば、自分たちがエスクード人である事を知らせる情報を口にするのは憚られる物であった。此処はマズール領なのだ。しかし、眼の前で佇んでいるのは誰もが敬愛した最後のエスクード王の息子。シャル・デルニエ・エスクードの時代をよく知る初老の村人たちは、その最後の王の息子を責める事も、助ける事も出来なかった。唯、遙か昔にエスクード建国に助力したと言われている―――実際に存在するのかどうかも解らぬ竜族に、無言の情けを乞う事しか―――

ユーリは考える。昨日の騎士たちが本拠地——つまりマズール王国に戻れば、事の詳細は伝わる。マズールに反逆した旧エスクード人の村。其処に存在した仇国の王子。同じく、忌み嫌われた種族の娘。

もう後戻りは出来ないな、と心の中で呟く。

ユーリは老人の言葉を受け、不意に懷から紙切れを一枚取り出して渡した。

「この地図に記してある場所に我が父の遺産が多少ながら埋められています。それを資金源に貴方達も村を出てください。数日すれば昨今のマズール騎士団が総力を挙げてこの村を潰しに来るでしょう。私の作った火の粉で貴方達まで焼け死ぬことはない。どうか…逃げてください」

悲痛な言葉を紡ぎながら。

「王子殿下がそう言いなさるのでしたら、そう致しましょう。しかし、殿下はどこへ行くおつもりなのですか。此処は辺境地、それも今やマズールの支配下です。近場に栄えた街もなければ…貴方にとって周りは敵だらけでしょう」

「…それを承知でマズールの王都^{キール}へ向かいます」

村人たちが目を見張った。わざわざ敵国の本土に向かうとはどういう了見なのか。しかし、鋭い決意に満ちたユーリの目を見た上で、詳細を訪ねることは躊躇われた。それを止める事は尚更である。

「今までお世話になりました。いつかまた…出会えることを祈っています」

ユーリは踵を返し、リリアーナはユーリの服を掴んだままそれに

釣られる様に一度村人に頭を下げて背を向けた。



「ユーリ、村人の皆…大丈夫かな…」

「……」

ユーリの「旅に出る」という言葉を受けて、家の中の物を出来るだけ早く整理し、同時に旅に必要な物だけを選別している最中、リリアーナがユーリに訊ねた。

ユーリには村人たちに危機が迫ることが明白だと解っていた。今から村人総出で村を発つ準備をしたところで――遅いのだ。騎士は馬という迅速な移動手段を持ち、また、騎士である以上追跡の技術もあるだろう。村人の方は、ユーリの了見の所、おそらく村を発つのに三日は要する。何処に向かうかも定まらず、故に廃墟に迷い込まぬ様に、長い間を生き抜ける様に、荷物は多く、幼子や老人が多い事も相まって移動速度は大したものにならない。

確実に追いつかれる。

「きっと大丈夫だ。心配するな、リリィ」

確信のない薄っぺらな言葉しか返せない自分が恨めしかった。

しかし、同時に、彼らを救う一つの方法も知っていた。唯一の希望――それはマズールキール騎士団が追走隊を放つより先に彼らの本拠地、つまりマズール王国王都キールへ向かい、『手を打つ』こと。そこにしかない。

ユーリは頭の中を廻る思考をそこで一旦切り、旅用のバックパツクに残りの旅用品を力づくで押し込んだ。

そして先に支度を終えていたリリアーナの方を振り向き、彼女にこれ以上の不安は抱かせまいとある限りの理性を総動員して柔和な

微笑を浮かべ、短い言葉を紡いだ。

「行こう、リリイ」

リリイは賢かった。故に、その微笑が含む意味に咄嗟に勘付いてしまっていた。それでも、ユーリが逆にその様子に勘付かないようにと、彼女も優しい微笑を顔に貼り付けて答える。

「うん、行こう、ユーリ」

ユーリは微笑んだリリイの手を取り、彼女の手を掴む手に少し力を込める。この手だけは離すまいと――胸に刻みつけて。そして――全てを取り戻して見せると、決意を込めて。

最小限に抑えた荷物を背負い、風を防ぐ為の大きめのマントを体に巻き付け、リリイと共に家を出た。

さようなら――



マズール領――ヴァンガード協定連合法下、王都キール。

マズール王城内謁見の間――

壮大な天使の絵が天井に描かれている謁見の間で、マズール王は耳を疑う報告を部下から聞いていた。少し灰色掛かった山羊髭と、同じ色の長い巻き毛を揺らす初老の男である。淡い緑の瞳はそれとなく狡猾さと隙の無さを見る者に窺わせ、彼が頭上に冠むる金で彩られた小さな王冠にはグリフォンの肖像。その頂を得る者が、確かにマズールの王である事を如実に報せていた。

「頭を上げよ。下を向いては報告するのにも難い。そして申せ、何があったのかを――」

謁見の間の玉座に座るマズール王の前、三段の階段の下側で、片膝をついて報告をしているのはマズール王国独自の防衛力にして、最大戦力である《マズール騎士団》を率いる長――《ケーネ・ヴァスカンド》であった。短く切り整えられた灰色の短髪、マズール王の言葉に従い、階段状のマズール王を見るその双眸には僅かに青み掛かる強い意志の籠った水色の瞳。切れ長の眉は上に傾いており、一層彼の瞳に宿る意志の強さを強調させる。騎士団を受け持つには些か若さが残っているようにも見えるが、くつきりとした顔立ちと無駄の無い立ち振る舞いには、清廉という言葉が似合う。重装の鎧に身を包み、腰にはマズール紋章の刻まれた幅広の剣の鞘。ケーネ・ヴァスカンドはマズール王の許しを得、直ぐに言葉を並べていった。

「はっ。昨夜、旧エスクード領の土地管理に遣わせた部下が王都キールに戻りました。彼らには旧エスクード領東部の辺境を宛がっておりましたが、予定よりも早くに王都へ帰還した部下に理由を問い詰めた所、虚言とも妄言ともつかぬ弁が返って来たので御知らせに参った次第です」

「虚言とも妄言ともつかぬ言葉を――か？」

「はい、私人の判断で有耶無耶にしようべきではないと判断致しました。此処に部下の言葉を述べさせて頂きます」

ふむ、とマズール王は少し首を傾げた。少なくとも、マズール騎士団の末端の騎士の虚言を態々王に伝える訳もなかうと思ひ、少々疑問こそあれど、とりあえずはケーネの言葉に耳を傾ける。

「旧エスクード領東部辺境にて、旧エスクード人の隠れ蓑となっていた田舎村を発見。同東部に於いて最近発掘された鉱山の労働資源

として活用しようとした所——この点に尽きましては別に私の言葉で述べさせて頂きますが、今は割愛致します——その村で不意の戦闘状況に陥ったようです。然し、同村にて戦闘状況を継続している最中、ある一人の青年が状況に介入。誠に申し上げるに難き事ですが、そのたった一人に青年に派遣されていた騎士の大半が壊滅させられました」

「エスクード人：か。奴らの持つ『血』は争い事に向いているからな：多少の犠牲は止むをえまい。それで、報告はそれだけか？」

「いえ、肝心の所が御座います。騎士達は撤退際に、その青年がある伝言を我らが王へと伝えるようにと言葉を紡いだようなのです。その内容が問題とする所で——彼はこう宣言したのです、我が王——」

我が名は《ユーリ・ロード・エスクード》。マズール王国に滅ぼされしエスクード王国の末裔である、と。

「《ユーリ・ロード・エスクード》——」

マズール王の表情が一瞬にして曇った。

忘れもしない、とマズール王は心の中で同時に毒づく。第三次レザール戦争において、唯一生死を確かめる事が出来なかったエスクード王国要人。そして、最も生死を確認しなければならなかった者である。エスクード王国の王子は一人だった。シャル・デルニエ・エスクードの妃が子を産むという事に関して、あまり恵まれていなかったからである。そしてその妃はレザール戦争にて没した。この眼で見たからには違う筈が無い。とはいえ、シャル・デルニエ・エスクードが没した状態なら、この際妃の生死など些細な問題だった。問題なのはシャル・デルニエ・エスクードがその身に宿すエスクード王の血の系譜であり——そして、最も重要なのは、その時点でエスクード王国を継ぐ可能性のある存在の生死である。

「それは真か、ケーネ」

マズール王はケーネに対して真偽を問うが、まず以て、ケーネ自身が部下の言葉を虚言妄言の類と称している限り、彼自身に真偽を決定する材料はない。

「明くまで、で御座います。真実をこの眼で見極めるまでは、私個人では判断のしようがありません」

「いや、構わぬ。私の方こそ下らぬ事を言ったな」

マズール王は少し苛立った様子で自分の頭を掻いた。虚言であればいい。むしろ、虚言であってくれ、と思う。マズール王はエスクード王族にある種の畏怖を感じていた。そして脳裏に過る最終的な疑問。その青年は本当にエスクードの末裔なのか。

「その者の特徴を部下らは見ていたか？ 特徴について何か言っていたか？」

「御意に御座います。それ故に、私は此処に参りました」

ケーネはマズール王の言葉を予測していたかのように、即座に言葉を紡いだ。

「部下にその人物の外見的特徴を述べさせたところ――」

その者は『銀の髪』と『真紅の瞳』を宿していたと、とケーネは発した。

言葉を聞き、マズール王は疲れ果てたように「嗚呼……」と短い声を上げた。ケーネはマズール王の様子を見て、個人的な確信を得る。

「虚言ではなかった、と言う事でしようか——」

「……正に。あの忌々しいシャル・デルニエ・エスクードと同じだ。『銀の髪』と『真紅の瞳』はエスクード直系王族の最たる特徴。……間違いないだろう——」

最後の言葉はまるで自分に言い聞かせるように呟かれた。マズール王の意気が消沈していく様をケーネは傍らで見ていた。マズール王はエスクード人を恐れている、という事実が眼の前の光景から伝わり、これ以上王を苦しめる事もないだろうと、ケーネは咄嗟にせめてもの慰めの情報を声に出した。

「——恐れながら陛下、私自身部下の話で奇妙に思う節があります……」

ケーネは畏まって言った。その表情には微塵の動きもない。

「部下達の話によると、その青年は《魔術》を行使したようなのです。さらにその時、右の真紅の瞳が黄金色こがねいろに変色していたと——」

「魔術……だと？」

誠に御座います、とケーネは端的な返事をする。

マズール王は思案するように顎元の髭を何度か指で摩り、声を発した。

「その一点に於いては何かがおかしいと言わざるを得えないな。エスクード人は古来より『魔術の資質』に恵まれていなかった。自然出産で生まれたエスクード人にはまず魔力が宿ることはない……。それに——金色に染まる瞳か……。——ベルマール、何か心当たりはあるか？」

そこでマズール王は思いだしたかのようにふと謁見の間の玉座側から、真横に向かって声を投げかけた。謁見の間の上部から玉座の左右を覆い隠す様に垂れ下がった紅色のカーテンの裏から、一人の男が姿を表す。

「いいえ、陛下、私には心当たりは御座いません」

白い肌に整った顔立ち。齡は二十代半ばぐらいか。老獺さを湛える紫の瞳の光と、落ち着き払った雰囲気とは裏腹に、その男はひどく若く見えた。長い金髪は肩を優に覆い、紫の双眸は言葉を発した後も穏やかな光を灯している。

「ふむ…『旧エスクード人のお前なら』何か知っていると聞いたのだが…」

再び思索に耽るマズール王。ふとその後続いた言葉があった。

「シャル・デルニエ・エスクードの下で『王国宰相』をしていたお前にも解らぬか」

「ええ——心当たりは御座いません」

紫の双眸は表情の変化を湛えない。全く動じない微笑を湛えたまま、ベルマールは答えた。

マズール王は、心の中で何も知らぬ筈があるまい、と思っていたが、何にしても、この妙に老獺染みた男が情報を口走る事はないだろうと思い、一旦彼に対する尋問を取りやめた。

「まあよい。——ケーネ、土地管理については継続して行うよう伝えよ。やり方はお前に任せる。同時に、エスクードの末裔を語るその者の正体を更に正確に調査するよう別働隊を派遣するのだ。そ

の者を捕縛出来た場合は——私の前に連れてこい」

「はっ、御意のままに」

マズール王の王命に対し、ケーネは短い返事の声を上げると、徐に無駄のない動きで立ち上がり、一度マズール王に向かって頭を垂れ、即座に踵を返した。

そこで、マズール王が思い出したように一人ごちて呟いた。

「ユーリ・《ロード》・エスクードか——大層な名だな」



ベルマールにとっては、いつもの見慣れた謁見の光景だった。しかし、彼は今、歓喜に満ち、そして震えていた。その感情を愚かにも表には出すまいと、ベルマールは理性を総動員して柔和な微笑を浮かべ続ける。変化を悟られてはいけない。横で玉座に座り、思案気な顔をしているマズール王に——

「陛下、私めはまだ執務が残っております故、先に失礼させて頂いても宜しいでしょうか」

声は震えていないだろうか。ベルマールは内心に若干の不安を抱きつつ、言葉を並べたてた。

マズール王はベルマールの内心に気付いている様子もなく、ベルマールを尋問すると言うよりも、どちらかと言えば未だに自分の思考に区切りをつけて置きたいようで、少しの間を置いてベルマールの言葉に返答した。

「良い、下がれ。末裔について何か解れば逐一知らせよ」

「御意のままに——」

ベルマールはいつものようにゆっくりと足を動かし、足早になっ
てはいないだろうか、等の些細な不安を再び抱いて、しかし、よう
やく王座側にあるマズール王城の廊下への扉を潜り、同じようにゆ
ったりとした動作で扉を閉めたところで、声を出さずに、それでも
――大きく深呼吸をした。



《ユーリ》。《ユーリ・ロード・エスクード》。なんと聞きなれ
た名か。

ベルマールにはマズールにおいて最大の『穢れ』とも見なされる
過去があった。それはベルマール自身の行いから来る物ではなく、
正確にはマズール王によって身に刻まれた後天的な穢れである。

旧エスクード王の側近にして――エスクード王国の宰相。それ
がベルマールの過去の身分である。

そんな彼が何故、今ではマズール王の側近をしているのか。

理由は単純で、解りやすい物だった。ベルマールは王の側近とし
て最上級の力を持ち合わせていたからである。政治力、戦略力、そ
して――個人としての武力。全てを高次元で持ち合わせていた。
その脅威性を誰よりも知っていたのは、敵国の元首であるマズール
王その人。一たび反抗すれば、ベルマールの畏怖にすら値する多彩
な能力を自分の身に刻まれかねないという状況にある中、それでも、
故に、使えるものはどんなものでも活用しようとする意気の強い現
マズール王は、ベルマールを第三次レザール戦争終結後に捕虜とし
て確保した際、誓約系魔術で、とある誓約と制約を彼の体の内に刻
み込み、同じく一国の王である自分の片腕として使用することを決
めたのだ。

「嗚呼、しかし、何ということだろう」とベルマールは自室で誰

にも聞こえないように呟いていた。

ユーリが生きていた。これ程までに歓喜を覚えたことがこれまでにあっただろうか。

仇敵の王に仕えなければならないという絶望に近い暗闇の中で見つけた光。銀の髪に真紅の瞳、そして――『魔術を行使するエスクード人』。ベルマールは知っていた。シャル・デルニエ・エスクードの一人息子であるユーリ・ロード・エスクードが、エスクード人として生を受けながらも、ある特異な理由の所為で魔術の資本である《魔力》を体に宿している事を。

どう考えてもユーリだ、と何度も確かめるように頭の中で反芻する。愛する友の息子。あるいは、自分の息子のように可愛がったエスクードの第一王子。

そして――ベルマールの胸にはマズール王に仕え始めてから心の奥底に沈殿していた光と決意が浮き上がっていた。

「これで、私にもやらねばならぬ仕事が増えたようです」

全うしましょう、最後の君の命……否、願いを――

ベルマールはほんの一瞬だけ決意の籠った鋭い視線を自室の窓から外に見える空へと投げかけ、しかし、次の瞬間には直ぐにいつも通りの微笑を浮かべた。

3話 「郷愁は廃墟に薫る」

エルフとは、人間とは一線を画す人型として古代より存在した。彼らの歴史を知る術は今でもない。

それは人間とエルフの間にはかつてより断絶があったからだ。

少なくとも人間という種族が存在し始めた時点で同様に世界のどこかには存在していたのだろう。

記憶に新しい、かの《グラン聖戦》はエルフの素性の確証を得るには絶好の機会であったが、場所が場所、争っている最中に彼ら进行分析する余裕などなかった。グラン聖戦で明らか——というより実証を基に確実な情報が得られたとすれば、それは彼らの魔術的素質の高さについて、である。

右手に剣を、左手に盾を持ち、近接戦を繰り広げたのは主に人間。右手に杖を、左手に魔術書を持ち、遠距離戦を繰り広げたのはエルフ。

大仰というか——あからさま昨だった。神は余程、種族間に明確な差を作り出したかったらしい。エルフの生まれ持つ魔力の絶対量は人間の数倍。逆に人間ほど身体能力に恵まれていない印象を受けた。いくら絶対量が凄まじいと言っても、エルフも生物だ、魔力が枯渇しないということは有り得ない。

当時、物量で攻め入ったヴァンガード連合に押し切られ、接近戦を余儀なくされた時のエルフは貧弱そのものだった。しかし、もちろんこれは普遍論ではない。鍛錬や才能によって多くの魔力を得る人間はいるし、同じように、高度な身体能力を持つエルフもいる。あくまで両種族間に明確な差を見出そうとするとそうなるわけであって、必ずしもこの情報があらゆる場に於いて適応される訳ではない。その点は承知してもらいたい。

エルフはその魔力——代替して言い換えれば、生命的燃料の量——故に、長命な種族だ。老いを知らぬ容姿という点においても、美

しい個体が多いのが実状である。だからこそ、人間から妬みの対象にされたり、弾圧の対象にされたりもする。

人の感情は時に強烈な精神の揺さぶりを起こし、他者を傷つけもする。

真に厄介なものだ。

いつか両種族が和解の道を通ることを切に願う。

『エルフの生態』著…カリギュラ・ミレー 天歴3310年



村を出て数日。

徒歩での移動は思っていた以上に辛い。軋む足腰。荷物は食料が減ったことで徐々に軽くはなったが、蓄積する疲労を考慮するとあまり意味はなかった。

なによりユーリは危惧していた。リリアーナの事を。

ユーリはその境遇上、身体的強度が並外れている。そのユーリでさえ、連日の徒歩による移動で、若干の痛みを足腰に感じ始めていた。エルフである事を兼ねても、リリアーナにとっては予想以上に辛い行程な筈だ。

「リリィ、疲れてないか。大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ。私は大丈夫——」

何度訊ねても、彼女は大丈夫、とただ言い続けた。まさか、大丈夫な筈などないのに——ユーリはリリアーナの精神力に感嘆しつつも、彼女が頑なに弱音を吐かない理由を知っていた。それでも、彼女の為に長い休息を取る事は出来ない。その遅れが、村人たちを殺してしまうかもしれないから。もどかしだけがユーリの胸に募って行った。

「ユーリこそ大丈夫？」

額から細かい汗を流しながらも、彼女が笑みを浮かべてユーリに言う。

「ああ、俺は大丈夫だよ。このくらい大した事ないさ」

レザール戦争の時に比べると、という言葉が続けて出そうになったのをユーリは理性でなんとか押し留めた。『戦乱の記憶』をリリアーナに思い出させてはいけないと理性が叫んでいた。しかし、言葉で出さなくともその記憶は『景色』に映ってしまう。

ユーリとリリアーナが今居る場所は、エスクードの旧市街——旧エスクード東端の街——『旧エスクード領ファスレア』。建物は崩れ落ち、焼け爛れている。過去、緑の映える美しい街だったファスレアは荒れ果てた荒野と、黒ずんだ瓦礫の街にすり替わっていた。

景色は無音で二人に語り掛ける。

無言でいるのが辛くなったのか、リリアーナが率先してユーリに話しかける。

「ここら辺は——昔は綺麗だったのにね……」

「ああ……本当に……綺麗な街だった——」

それでも口は凄惨な光景を代弁するばかりだった。昔の姿を知っているからこそ、今の姿と比べてしまう。

幾ばくか歩き続け、旧エスクード領ファスレアを抜ける頃には日が暮れ始めていた。このまま夜になるまで歩き続けて野宿をするより、ファスレアの比較的傷が少ない建物の中で一夜を過ごす方が安全だろう。風を遮る建物があるだけで、休息の効果は数段上がる。そう思い、ユーリがリリアーナに言った。

「今日はどこか安全な建物で一夜を過ごそう。明日頑張れば、どうにかキールには着けそうだ。リリイ、それでいいか？」

「うん」

リリアーヌは笑顔で答える。疲れはあるだろうに。リリアーヌの健気さはかえってユーリに罪悪感を募らせた。

廃墟ではあるものの、人の居ない街というのは現実味が薄れていて、不気味さと幻想的な郷愁が相まって不思議な感覚にさせられる。それもユーリにとっては一時的な感情であった。

人々で賑わっていた頃の面影を知っているからこそ、虚しくもなる。

そんな微妙な感情の遍歴を繰り返している中、比較的痛んでいない建物を見つけたので中へ入ろうとした。そこでユーリは何かに気づいたようにリリアーヌをその場で制止する。

「倒壊する危険がないか、俺が見てくるからリリイはここで待っていてくれないか」

「うん、行ってらっしゃい。気をつけてね、ユーリ」

リリアーヌは文句一つ漏らさない。細い四肢を擦りながら、所々灰に汚れた美しい顔にほんの少しの無理を湛えた笑顔を貼り付け、ユーリを送り出す。ユーリは彼女の顔に纏わりついた灰を指で優しく落としてから、一步、一人で廃墟に足を踏み入れた。

違和感の正体は余りにも呆気なく――ユーリの眼前に姿を現した。

床に散乱する灰色の物体――薄汚れた人骨。

ユーリはそれを見て何の動揺も抱かなかった。其処に骨が在るのは何もおかしい事じゃないから。当然なのだ。それに、見慣れてい

る。

ファスレアで何人が死んだと思っている、とユーリは自分に語りかけた。

感傷も何もなく、ユーリはすぐに引き返し、首を傾げているリリアーナに声を掛けた。

「天井が少し倒壊しているから：他の家を捜そう」

さりげなくリリアーナの手を取って、足早にその廃墟から離れた。そうだ、思い出せ、此処は戦乱の火の粉が降り注いだ街なのだ、と心の中に言葉が生まれる。今こうして歩いている道端に人の残骸がないのが不思議な程に、此処は荒れた土地なのだ。それでも、リリアーナは気付いてしまっているかもしれないが、せめて、少しでも過去を思い起こさせる『物』は彼女には見せまいと今まで以上に歩く道に気を配って、ユーリはリリアーナを連れて歩いた。

仮初の平穏がある廃墟を捜しに――



ケーネ・ヴァスカンドはマズール騎士団の一個小隊に例の辺境地の土地管理を慎重に行う事を命じた後、ベルマールに呼ばれて彼の自室に向かった。数々の豪華な部屋が存在するマズール王城の中であるのに、ベルマールの部屋はたいして大きな部屋ではない。宰相という王の右腕でありながら、質素な部屋で生活するベルマールにケーネは多かれ少なかれ好感を抱いていた。もちろん、それはベルマールなりのマズール王国への反逆なのかも知れないが、そんな様子を微塵も見せない彼はやはり優秀だと思う。既にその才覚の数々を見せつけられてもきた。何より、ケーネにとって、ベルマールは身分の違いはあれど――気兼ねなく話が出来る友のような存在だった。身分上、言葉はいつも堅くなってしまうが。相手の話を何の文

句もなく聞き、親身に答えてくれる。能力をとつても、人格をとつても、信頼を置くには十分すぎた。

そんな事を考えている内に、いつの間にかベルマールの部屋の扉まで辿りつく。扉には《王国宰相執務室》と彼の役職を表す言葉が描かれたプレートが掛かっていて、また、そのプレートに書いてあるのが彼自身の名前ではないのが、少し気がかりだった。いや、仕方ないか。彼は旧エスクード王国宰相なのだ。仇敵の王城に自らの名前など書きたくもないのだろう。

「失礼致します」

ベルマールの自室の扉をノックして声を上げる。
中から、「どうぞ」と静かな声が聞こえてきて、ケーネは扉をゆつくりと開けた。

「急に呼び出しまして申し訳ありませんね、ケーネさん」

「いえ、ベルマール様のお呼びとあらば――何時でも迅速に駆けつける所存です」

「ケーネさん、私に『様』等の敬称を態々付ける必要は在りませんよ。私は貴方が憎むべき旧エスクード人なのですから」

優しげで、少し妖艶な笑みを浮かべるベルマール。その紫の双眸に貫かれると、自分の感情を全て読み取られてしまいそうで、ケーネは咄嗟に視線をベルマールの双眸から外した。

「そうは参りません。ベルマール様は王国宰相です。私より身分が高いのですから、敬称は無くってはならない物ですよ」

そう言いつつも、実の所、前提としてケーネはベルマールを憎んでなどいなかった。

「貴方も『御堅い』ですね——。いやこの場合は律義とでも言いましょうか。時には羽目を外しても良いと思うのですが——まあいいでしょう。ともかく、お入りなさい」

「はっ、失礼致します」

ケーネは一度頭を垂れて、いつも通りのきびきびとした無駄のない動きでベルマールの用意した椅子に腰かけた。

「それで——話と言うのは？」

「ええ、実はケーネさんに御願いたいことがありますて……」

「为什么呢？」

「——つとその前に、最初に質問を一つ。マズール騎士団を例の村へ再派遣させましたか？」

「はい、先ほど二個小隊に明日例の村へ発つようにと——それがどうかしめたか？」

「いえ、実はこの時分にあの村の周辺は特別風が強くなるので少し騎士団の派遣をずらしてはどうかと思ひましてね。移動手段の馬が余計に疲弊するでしょう。急ぐ以上に、逆に膨大な日数を費やしてしまうかもしれません。自然に逆らうのは得策ではありませんし、どうせなら安全に後日進行させてみては、と提案しようと貴方を此処へ呼んだのです。短期間の物ですので数日すれば止むと思いますし、土地管理に支障はないでしょう」

「それは——確かですか？」

「ええ、何と言っても、私は旧エスクード王国の王国宰相でしたから。母国の情報は大体頭に入っています。ちなみにその風は《ハリネ》という突風帯でして、旧エスクード地方を時分毎に転々とする厄介な風なのです。毎年作物類に被害を与えるので好かれる物ではありませんでしたね」

「……陛下はなんと？」

「――私に任せて下さいました」

王が任せるというのだから、彼の言葉は正しいのだろう。同時に、従うべきなのだろうと思う。ケーネはベルマールの言葉に頷き、直ぐに返事を返す。

「そうですか。ならば、急遽日時変更を伝えてきましょう」

「有り難う御座います。宜しく御願いますね」

ベルマールが笑顔でケーネに礼を言う。

解りました、と小さく頷いてケーネは椅子から立ち上がった。再び一度だけ頭を垂れて、踵を返す。

ケーネが部屋から出るべく、扉に手を掛けようとした所で――ベルマールが小さく呟いていた。

「――貴方も過去の楔に縛られるのではなく、今の己の心のままに行動なさい」

それはとても小さな声だったが、ケーネの耳は確かにその言葉を捉えていた。

「それは私に対しての言葉でしょうか？」

ベルマールは言葉を濁し、苦笑しながら、いえ独り言です、と返した。

「：では失礼致します」

「御苦労さまです。伝令、頼みましたよ」

「御意のままに――」

願わくば、彼が己の名誉を取り戻しますように――

4話 「王都で歯車は廻る」

ユーリとリリアーナがマズール国王都キールに着いたのは廃墟で一夜を過ごした次の日。足腰の軋みは溜まった疲労の所為で断続的な鈍痛を抱かせる程になっていた。ようやく、徒歩での旅路に休息点を見出し、心の底から嬉しさと安心感が押し寄せてくる。

「やっとだな――」

「――もう私歩けない。あと一年は歩きたくない。一年と言わず一生歩きたくない。ユーリーこれから一生私を背負って――」

「それだけ冗談が言えるならまだ歩けるだろ……」

リリアーナは終着点であるマズール領キールの外観を眺めながら、怨念の混じった声色で呟いた。数日間に渡る旧エスクード領踏破行程で、満足に水を浴びる事も出来ず、リリアーナの金糸の髪は砂に塗れ、所々毛先が飛び跳ねていた。それを手で何度も抑え、元の方向に戻るよう慣らしてはいたようだが、最後の数日には結局戻らないという事実を悪態と共に受け入れ、慣らす事もしないようになっていた。その変化をユーリは面白がっていたが、当のリリアーナは冗談じゃないと毎回ため息を吐いていた。

兎にも角にも、無事に王都キールへ辿りつく事が出来たのは、二人にとって良い出来事だった。

急に気が抜けたのか、リリアーナが足を少し震わせてその場にへたり込んだ。ユーリはリリアーナに満面の笑みを向け、言葉を紡いだ。

「よく頑張ったな、後で飴玉を買ってやろう」

「飴玉だけ？ 私の苦勞は飴玉と同価値だってユーリは言うんだね

――」

「待て待て、違うって。冗談冗談。好きな物を一つ買ってやる。理想的な交渉条件だと俺は思うが：？」

ユーリの言葉を受けたりリアーナが、咄嗟に嘘か真か判断出来ない程の繊細な演技を見せつけた。手で目元を覆い、すすり泣く様な声を上げて、肩を震わすリアーナ。突然の出来事に狼狽したユーリは恐る恐る別の交渉条件を持ち出してリアーナの様子を窺う。

「：一つ？」

すすり泣きがピタリと止まり、今度はユーリの眼を上目遣いで覗きこむ。もちろん目元に涙など浮かんでいなかった。してやられた、とユーリは頭を一度抱え、さらなる交渉を持ち出して来ているリアーナに根負けし、遂に負けを認める。

「解った：二つ買う：でもこれ以上は駄目だぞ、二つまでだからな――」

「ふふっ、ユーリって泣き攻めに弱いのかな？」

リアーナの方はしてやったりと口元に怪しげな笑みを浮かべていた。小さく笑い、ユーリの弱点を露骨に示唆してくる。リアーナの得意げな声色に、ユーリは「リリィにやられると判断がつかないんだよ、全く」とほんの少しだけ毒付いて、それでも渋々彼女の言葉は肯定した。

その後、再び足腰を叱咤し、王都キールの関所まで歩を進める。入門の手続きはすんなりと終わった。自分の外見は人目を引きつけやすい物である――特に西国に於いては――とそれとなく理解していたユーリは、マズール王国の最重要地であるキールの関所を潜るに際し、多少苦勞するかもしれないと思っていた。しかし、予想

は裏切られる。エスクード直系王族の特徴を見事に受け継いでいるユーリの外見に、些細な疑問すら抱かなかった関所の役人はともかくとして、レザール戦争時に父であるシャル・デルニエ・エスクードを見た事がある軍関係者ならば、自分の外見的特徴から自身の情報を抜き取る事は容易であるはずだった。つまるところ、そこから推測できるのは、村での一件から特に自分に関する情報は出回っていないという事。名は名乗った。レザール戦争に参加していた騎士団の連中ならば、余程の馬鹿でない限り自分が本物のエスクード王族の末裔であるという事に勘付くはずだった。だが、関所の対応を見る限り、その事実すら未だに確定させる事が出来ないでいるのだろう。

「そりゃあ——まさかエスクードの王子が態々仇国のど真ん中に訪れるとは予想しづらいだろうけど」

「少しは仇国らしい対応を見せて欲しかった？」

正直な所、少し拍子抜けである。残念がるユーリ。もちろん障害は少ないに越した事はないのだが——此処まで容易いと逆に不気味さを感じてしまう。深読みのし過ぎだろうか、と胸中で呟いた。

「俺の希望なんかどうでもいい。村の人達を救う事が先決だしな」

戦いに依存しているかのような狂気染みた考え方を一蹴し、ユーリは本来の目的を確認する。

そして遂に、歴史を動かす一步を踏み込んだ。



次の瞬間、目の前には煌びやかに栄えた街が映し出された。人々で賑わう広場、通り、そのあちこちには衣服や宝石、香辛料を初め

とした食物類、さらには動物に至るまで、様々な交易品が所狭しと露店という形で売り出されている。ユーリ達と同じような旅人風の人々が背荷物を背負いながら、馬車から降りながら、露店の店主相手に交渉を繰り返している。暖色系の色で整えられた家々の壁がより一層街の活気を促す。視覚的な豊穡。耳に入る多数の人の声。栄えている故の騒音。

そして――街の中心で天高く聳えているマズール王城。

自分でも不思議なほどに、それらを体験してもユーリに大した感情は生まれなかった。仇敵国の本土というのは頭で理解しているが、それでもユーリの心に動揺を生まなかった。

心象風景に残っている戦の傷が疼かないのならそれはそれでいい。思いのほか冷静さを保ちながらユーリはキールへさらに足を踏み入れた。



街に入って真っ先に気付いた事、というより、ふと思い出した事はリリアーナについてだった。

リリアーナはエルフだ。

今は長い金髪で隠れているが、彼女の耳は少しとんがっている。街中を通り過ぎる分では気付かれることも少ないが、もし間近で耳元を見られればひとたびに彼女がエルフであると気付かれる。

国家の基盤にエルフ差別が根深く張っているマズールの王都でリリアーナの存在を悟られるのは都合が悪かった。

「リリィ、宿を見つけたら買い物にいかないか？ さっきの報酬の一つ目として、何か買ってやるから。疲れてるかもしれないが――」

「行く！ 早く行こうユーリ！」

ユーリがリリアーナを連れ回す事に対する言い訳を並べたてようとした時、リリアーナはいつにもまして澁刺とした声で即座に返事をした。余りの声の大きさと、鬼気迫るような表情に面食らったユーリは苦笑せざるを得なかった。同時に、彼女が何故それ程に自分の提案に喰いついたのが解ったような気がして、自分の今までの行動、彼女と共に何かを買いに行くなどほとんどしてやれていなかった自分を少し呪った。

キール程栄えた街なら、安宿などいくらでもあるもので、思いのほか宿の手配は早く済んだ。部屋のひとつどの面積をベッドに取られている狭い宿だが、ベッドが二つある事と、近場に料理店が在る事を考慮し、何より宿賃の安さゆえ、そこに決めた。長い間滞在する事は仮定の中から除外していたので、最低、ユーリがマズール王城で策を施すのに必要な二日か三日の間だけ滞在出来ればそれで問題はなかった。

旅荷物を宿に置き、貨幣の入った革製の貨幣袋だけを腰のベルトに紐で括りつけ、リリアーナと共に宿を出る。通りに展開された数々の露店を見て回り始める。

リリアーナの好奇心は尽きる事が無く、彼女は様々な物を見て回った。

よくよく考えても見れば、第一に、彼女にとってはキールのような栄えた街へ来ること自体、初めての体験だったのだ。

その細い体のどこにそんな体力があるのか、と少し皮肉でも言うてやろうかと思ったが、楽しそうに動き回る彼女を引き留めるのも気が引けて、結局言わずじまいだった。

いくつかの露店を過ぎ去り、隙間なく並んでいた露店も点々とし始めた頃、不意にユーリがひっそりと佇む一つの露店を見つける。まじゅつそうぐ魔術装具と呼ばれる体に着けるタイプの魔術用品が並ぶ露店だった。怪しげな宝石が括りつけられたイヤリングや、難解なルーン文字が刻まれた金のブレスレット、同様のベルトや小剣に至るまで、様々な種類の魔術装具が置かれていた。店主と見られる女は、顔の

下半分を怪しげな黒く薄いマスクで覆い隠しており、頭に被る『いかにも』と言った風の《魔女帽子》と合わせて、顔をよく見る事が出来なかった。

露店の前で立ち止まったユーリに店主が気付くと、線の細い声で言葉を投げかける。

「入り用かね？」

「ん、ああ、視覚遮断、もしくは視覚変化を促す類の魔術装具は置いているか？」

顔が見えない以上、顔からは店主がどれくらいの年齢なのか判断のしようが無かったが、声色から、店主が若い女である事はなんとなく理解できた。するとそこへ、ようやくリリアーナが追いついてきて、ユーリの隣まで走ってきては目の前に並ぶ魔術装具の数々に目を見張り、驚きの声を上げる。上げまくる。その様子を見ていた露店の店主は、ほう、と一度短い声を上げ、ユーリに対して言葉を紡いだ。

「《エルフ》か。確かに、この娘が街を歩くにはお前の言うような魔術装具が欲しい所だな」

不意の言葉。リリアーナがエルフである事が一目でバレた。此処はキールだ。不味い、と一瞬身構えるユーリ。露店の店主はそのユーリの様子を見て、妖艶さを伴う含み笑いを上げた。

「フフ、そう身構えるな。私はその娘をどうしようとは思っていないぞ？」

彼女の言葉が真実であるかどうかは未だに判断しきれないが、少なくとも彼女が即座に行動を起こす気はないと確信を得たユーリは、

渋々といった表情で身構えていた体から力を抜く。

「それで、周りの視覚に訴えかけるタイプの魔術装具だったな」

「ああ、大仰な物じゃなくていい」

特徴的な耳元を人々の眼から遠ざける事が出来れば、と付け加え、ユーリは店主を見た。店主の女は、露店内の魔術装具を物色し始め、少し経ってから一つのイヤリングを差し出した。

「このイヤリングは人の視線を特定箇所から外す効力を持つ。周りの者の意識に訴えかけるタイプの魔術装具だ。効力は半年は持つだろう。効力射程外から見られたり、深く魔術に通ずる者に長々と見られたりすると効力は意味を為さないだろうが、後者に関しては余程の魔術的資質の持ち主でなければバレはしないだろう。この街でそんな者に会う事などほぼ無いから安心するがいい。あと一つ、一度この魔術装具を見破った者には以降効力を発揮しない。一度も意識に本当の姿が映り込んでしまうと、当然の事、大した効力は得られなくなるという事だ」

ユーリは彼女の言葉に少し考えを巡らせる。いつまでもキールに留まる訳ではない。効力としては十分か、と一度頷いて、ユーリは言葉を紡いだ。

「解った、それでいい」

「交渉成立、だな」

彼女はそう言いながら、指を三本立てて見せる。ユーリは一拍置いて、その意図するところを知ると――

「銅貨三枚か？銀貨三枚か？――まさか金貨三枚じゃあるまいな」

「青年、交渉事をする時は金を得る側に判断を求めてはならない。強引にでも、自分の欲する条件を押し付けたまえ。でなければすっからかんになるまで搾り取られてしまうからな。特に、マズール人のような交渉事に長けた民を相手にする時は——まあ私はマズール人ではないが」

ユーリは彼女に振り回されているような印象を得た。不思議で、魅惑的な——声そのモノに魔力が籠っているかのような声音。彼女の言葉は意識の奥深くにまで響く。ふと脳裏に浮かんだ疑問をなんとなく彼女に投げかけた。

「——何者なんだ？」

彼女はその言葉を受けて、また小さく笑った。そして紡ぐ——

「私か？ そうだな、言うなれば——ぼくねんじん朴念仁シャル・デルニエ・エスクードの愉快な仲間達の一人だ」

フッフ、と笑い声を付け加えて、彼女はそう言った。ユーリの思考は止まる。何故彼女から父の名が発せられたのか。そんな中、続けて彼女が言葉を紡ぐ。

「お前の思考回路、行動理念は、生前のお前の父に全て見透かされていた、という事だ。《ユーリ・ロード・エスクード》よ」

「何故俺がエスクード王族の末裔だと——」

「解らないとでも思ったか？ 阿呆、そんな訳あるまい。少なくとも、世間一般に言う所の最後のエスクード王——シャル・デルニエ・エスクードを知る者ならば、お前の身に宿る銀の髪と真紅の瞳を見ればお前が何者かなど直ぐに予想がつく。その他大勢の者と私の違う所と言えば、『エスクード王族は滅びた』と思うか、『エスクー

ド王族の末裔はまだ生きている』と信じるかの違いだ。ゆえに、前者はたとえお前を見た所で自分の思い違いか何かだろうと適当に受け流す。しかし、私は受け流さない。何故なら、ここでお前を待っていたから——お前から私に声を掛けなくても、私からお前に声を掛けていたよ。一体何年の間待たされたと思っておる——」

彼女はそう言うのと、マスクを手で剥がし、ユーリとリリアーナに素顔を晒した。

「お前の母になるかもしれない女顔だ、よく目に焼き付けて置くが良い」

はい？ とユーリは呆けた声を上げた。ともあれ、素顔を晒した彼女の顔は、即座に目に焼きつけられる。闇を湛えているような、真っ黒で、少しウェーブが掛かっている髪、柔らかい輝きを放つ青味の強い紺色の瞳。クッキリとした目鼻立ちは、どこか気の強そうな印象を齎す。

ユーリが呆けていると、彼女が続けて言葉を紡いだ。

「実際は——《ソフィア》に取られてしまったが……まあ、アレも中々に良い女だった。仕方あるまいて……」

「おい、泣いてるのか？」

「泣いてなどおらん！」

とは言いつつも、彼女の目元が潤んでいたのユーリは確かに見た。訳が解らないまま、彼女の言葉を聞き続けるユーリ。対する彼女は、目元をゴシゴシと拭い、また言葉を並べたてて行く。

「——それにしても、よく似ておる。髪と瞳はシャルの物だが、その他はソフィアに瓜二つだ。綺麗に産んでくれた母に感謝するが良

い。シャルに似ていたら今頃筋骨隆々のむさい男になっておった所だ。それはそれで逞しさを感じるゆえ、悪くはないが――」

「解るように話してくれよ。まるで話が掴めない」

ため息をついて、勝手に暴走を始める彼女を諫めた。

「そうだな。順を追って説明しよう。まず、私の名は――《イゾルデ・リンデ・ミステア》。お前の父、シャル・デルニエ・エスクードの『友人』といった所だな。腐れ縁とも言う。そして私は――《魔女》だ」

魔女――人外れ、魔力を多く持った人間の女性の事を指す。遙か昔より、その魔力故、老いを知らず、長い間生き続けている者達の総称。魔女と言う総称は、どちらかと言えば悪い意味を持っている。人間でありながら、エルフに相当する長命を誇る彼女たちは、古来より同じ人間種に恐れられ、排斥されてきた。今では、彼女たちは人里を離れ、孤独に生きているという。魔女である事を知られれば、今でも排斥の対象となる可能性があるから。

彼女はユーリに対し、その事実をあっけらかんと喋った。

「驚いたか？」

「それとなく、少しだけ。どちらかと言えば、最も魔力に疎いエスクード人の王族と、魔女が知り合いであった事に――」

「ふふ、お前の父は特殊だったのだ。あやつの交友は広いぞ。あやつが体現した独立国家の理念とは裏腹に、あやつ個人は人を惹きつける男だったからな。お前にもその素質がある。私をお前の元に惹きつけたくらいだからな」

イゾルデは嬉しそうに笑った。

「お前は私を忌み嫌うか？ 人の輪から外れ、長い時を生きる私を――」

しかし、その言葉を発した時のイゾルデは、消え入りそうな程に頼りない笑顔を浮かべていた。対するユーリは未だにこの魔女を前にして、解らない事が多かったが、彼女の問いには即座に返答して見せる。

「いや。貴女は人だ。常人より少し長く生きているだけの、人だ。それは貴女を忌み嫌う理由にはならない」

「魔女の長命を『少し』と言い切るか」

「事実だ。老いは常人より少し遅いだけ、命は常人より少し長いだけ。それ以外に何が違う？ 人が人である理由は、そこにはないと俺は思っている。不安ならば再度断言して見せよう――貴女は人だ。付け加えれば、俺達エスクード人の眼で見ると、魔の才に恵まれている貴女は羨ましく映るよ。もちろん、そのせいで貴女が被ってきた不幸を度外視すればの話だが」

「妙に器が広い男だな。奔放とも言うか。ただ単に細かい事を考えるのが苦手なだけか？ シャルと同じ事を言いよって――湿っぽい事を訊ねてしまったな。今のは忘れる」

イゾルデは再び嬉しそうな笑みを浮かべて、ユーリに言った。

「お前が今気にするのは私の目的……だな？」

「ああ、気にならないと言えばウソになる。父を知り、俺の存在を知る貴女の目的は何だ？」

話を切り替えてイゾルデが言葉を紡いだ。

「イゾルデと呼べ。私の目的は一つ。シャル・デルニエ・エスクー

ドの息子に出会う事。そして、場合によっては息子であるお前に助力する事だ。シャルは第三次レザール戦争に踏み込むに際して、エスクード王国と直接関係が無い友人たちを、全て遠ざけた。私たちが手を貸すと言っても、あやつは首を縦に振らなかった。歴代エスクード王の理念に生き、その理念に死んだ。しかし、あやつはこうも言っていた。『もし息子に出会う事があるならば、その時に手を貸してやってくれ』と――。あるいは、あやつは歴代エスクード王の理念の限界を知っていたのかもしれない。それでも、歴代の王の理念を無為にはさせまいと、事実上最後のエスクード王として理念を守り続けた。そしてエスクードは崩壊し、それでも尚、此処に今、新たなエスクードの血が流れ込んできている。シャルは古きエスクード王国を自分の代で終わらせ、新たなエスクードを息子であるお前に託した」

「ははっ、どちらにせよ、俺がレザール戦争を生き抜いて初めて成立する理論だな」

力無い笑顔で笑うユーリ。

「現にお前は生き抜いた。結果が全てだ、それで良いではないか――よく生きていてくれた」

イゾルデは不意に立ち上がり、ユーリを抱き寄せた。鬱屈していた想いを全て吐きだす様に、強くユーリを抱き寄せる。

その様子を不満げな表情で隣で見ていたリリアーナに、イゾルデが気付く。

「ヤキモチでも焼いておるのか？ 《リリアーナ》。フフ、お前が呆けていると私がユーリを攫って行くぞ？」

「ち、違う！別に私はそんな事思っていない――」

「そうか、ならユーリは私が貰って行こう」

「……それは駄目」

顔を俯けながら小さな声でリリアーナが口に出す。

「俺は誰の物でもないぞ…」

勝手に展開されるイズルデとリリアーナの無言の戦いにうんざりして、ユーリはため息交じりの声を上げた。イズルデの腕の中からするりと脱出し、背伸びをする。

「奔放な奴だな。性格はシャルに似たか。——それにしても、私の身体は気に入らなかったか？ 中身はそれなりに歳を食っておるが、体はぴっちぴちに若いぞ？」

魔女の特権の一つだ、とイズルデが女性特有の身体構造を強調しながら、悪戯気にユーリに言う。

「私の方が若いし…」

「その細長いだけを取り柄の貧相な身体でよく言う。歳の割に成長するべき所が成長していないようだが？」

「なっ！ 中身おぼさんの癖に！」

「聞き捨てならんな、リリアーナ。男好みの熟成された精神にぴっちぴちの若い身体、私は完璧だぞ？」

「嗚呼、もう勝手にやってくれ…」

うんざりとした様子でユーリは二人の言い争いが終わるまで待つのだった。



「——ということで、私はお前についていく。たとえお前が嫌だと言っても、勝手についていくぞ。実の所、助力するかどうかは本人を見てから決めようと思っていたのだが、シャルの息子である事を抜きにしても私はお前を気に入っている」

「別に断りはしないよ、イゾルデ。だが、もしかしたら、レザール戦争よりもずっと酷い戦いになるかもしれない。それで良いなら——」

「見くびるなよ？ 仮にも私は魔に恵まれた女——魔女だ。シャルが力づくで私を遠ざけなければ、私はレザール戦争に一人でも介入しようとしていたくらいだ。今更恐れなどない。私はお前の傍に居れば——」

リリアーナが睨む。イゾルデの直接的な物言いに、胸の引き締まるような思いを心に浮かべながら。

「ユーリはユーリ。イゾルデがユーリの父上の幻想をユーリに見ているなら——」

「リリアーナ、それは違う。確かにシャルとユーリは別物だ。私はユーリ個人に惹かれているのだ。ユーリを見て、シャルと違う事を知りながら、この男に惹かれているのだよ」

「む……」

イゾルデは女として自分よりも上手だと、否応なく理解させられる。それでも、彼女の存在はきっとユーリの助けになるのだろう。自分の胸に浮かぶ我儘な気持ちを抜きにすれば、彼女がユーリの傍に居る事は良い事なのだと理解出来る。

「公然と口説かないで貰えるか……周りの視線が痛い……」

「フフ、初心な奴だ」

ユーリが通りすぎる男たちの憎悪の籠った視線を受けながら、そう呟いた。傍から見れば美女二人を侍らせているように見えるが、その実二人とも特殊な境遇にいる者だ。ユーリとしては、男として嬉しさが無い訳ではないが、それ以上に視線を向けねばならない目標があるだけに、余り自分から関わりとうとはしなかった。イゾルデはまるでそれを気にせずに、ユーリの腕に自分の腕を絡める。リリアーヌも負けじと反対の腕に自分の腕を絡めた。

兎にも角にも、その日はイゾルデが店仕舞いをした後、ユーリとリリアーヌはイゾルデを連れて一度宿に戻った。

宿に着き、ユーリがイゾルデの為にもう少し広い部屋に変えてくれと宿の主人と交渉している中、リリアーヌがイゾルデに訊ねた。

「イゾルデは今まで何処に住んでいたの？ 家は？」

「キールの最西端だ。家は先日マズール騎士団に焼かれた。魔女である事が何処かからバレたらしくてな」

慣れた物だ、とイゾルデは呟く。辛かったね、とリリアーヌは咄嗟に言葉を述べていた。少し目を丸めてリリアーヌの言葉に驚くイゾルデ。

「リリアーヌの同情には不思議と嫌な感じがしないな。いや、私の事はいいんだ。私よりも、ユーリとリリアーヌの方が辛かっただろう。お前達は戦いに放り出されるにしては幼すぎた。辛かったろう？」

イゾルデはシャル・デルニエ・エスクードの個人的な知人であったが故に、エスクード王国の実情にも詳しくかった。そしてそれ故に、ユーリとリリアーヌが辿ってきた軌跡を熟知していた。

リリアーヌはふと笑って、イゾルデの言葉に返事を返す。

「私は大丈夫だったよ。ユーリが守ってくれたから。私の分も、ユーリが全部重荷を背負ってくれているから——」

「そんな事はない。お前にもお前の背荷物がある。ユーリが戦で壊れなかったのは、お前が傍らに居たからだ。それ程にレザール戦争には様々な狂気が渦巻いていた。ユーリをユーリたらしめているのはお前が傍に居るからかもしれぬ。少し悔しいが——」

リリアーナはイゾルデに姉のような優しさを見た。確かに、彼女の精神は成熟しているのだろうと思う。不思議な包容力を持った女性。魔女という意味嫌われた存在。それ故に、彼女は辛い経験をしてきている筈だった。それでも、その哀しみを周りに悟らせない。大人びた女性。

「そうかな。じゃあ一步リードってどこ？」

「今に見ている。直ぐに追い抜いてやる」

女同士にしか解らない視線のやり取りをして、リリアーナとイゾルデは同時に笑った。

イゾルデが先程露店の店主として見繕っていた視覚変化を促すイヤリングを取りだして、リリアーナの左耳に付ける。

「当分はこれで大丈夫だ。気にせずに街を歩くが良い」
「ありがとう——」

その銀のイヤリングを一度指でなぞり、リリアーナは満面の笑みをイゾルデに向ける。

当初些細ないざこざこそあったものの、既にリリアーナとイゾルデは打ち解けていた。

すると、そこへユーリが宿の主人の元から戻ってきて、結果を知

らせる。

「部屋は空いているって。夜も更けて来た。今日は旅路の疲れもあるし、早めに寝よう」

「リリアーナ、風呂へ行くか？ 髪を梳いてやろう。ユーリも来るか？」

「馬鹿を言うな…」

「本当に来たらぶっ飛ばすからね？」

「だから行かないって！」

リリアーナとイゾルデが笑顔で顔を見合わせる。

その様子に「いつの間にそんな仲良くなったんだよ…」とユーリは一人肩を落とし、これ以上女二人に振り回されまいとそそくさと部屋へ戻って行った。



安宿に設置された狭い風呂からあがり、二人が手配された部屋に戻ってくる頃には時計の針は深夜を指していた。

旅路の疲れからか、リリアーナは直ぐにベッドに潜り込んで寝息を立て始める。対して、同様の旅路を歩いて来た筈のユーリは、未だに目を開けていた。

「お前は寝ないのか？」

イゾルデが水に湿った髪をタオルで拭きながら、ユーリに問う。

「やるべき事がある」

「マズール王城に特攻でも掛ける気だろう。余裕の無さが目に見えるようだぞ」

村への再侵攻を止めなければならない。マズール騎士団の本拠地は王城である。手っ取り早いのは、本拠地に単独で潜入し、混乱を招く事。

「急くな、手は打ってある」

所が、イゾルデはそれを見越していたかのように言葉を紡いだ。

「手？」

「そう、そろそろその策が実る頃だ。少し外へ出よう」

イゾルデは外套を着込み、ユーリを促す。

二人はリリアーナの睡眠を邪魔しないように、宿の外へ出た。それから数分後、二人が宿の前のベンチに腰かけていると、一人の男が二人の元へ近寄ってくる。それはユーリの知る男だった。

「お待たせしました。いきなり真夜中に此処まで来いとは、いくらなんでも急すぎやしませんか？ イゾルデ」

金髪と紫の双眸を持つ男。

元エスクード王国宰相——《ベルマール・リ・シュトラス》、その人だった。

ベルマールの肩には真っ黒なフクロウが居て、そのフクロウはイゾルデの姿を見ると羽ばたいて彼女の肩に移動する。

「一体何の用——」

ベルマールは、半分言葉を紡ぎかけて、イゾルデの隣に座る銀髪の青年を見た。そして途切れる言葉。彼の口元は震えていた。

「ユーリ——！」

ベルマールは駆けよる。ユーリの元に。ユーリの方も、同じように驚愕を顔に貼り付け、立ち上がっていた。

「ベルマールさん……？」

「伊達にキールに長い間滞在していた訳じゃない。来るべき時の為に、それなりの手は打っておくものだ。このキールに居るシャルの友人は、一人ではないのだから」

得意げに鼻を鳴らすイズルデをよそに、ベルマールはユーリを抱き寄せた。ユーリの胎動をマズール王国宰相として聞いていたが、この眼で見るまでは——と思っていたベルマール。不意に、そのユーリが目の前に現れた。言葉は紡げなかった。一度は死んだと思っていた最愛の友の息子が、今こうして腕の中に居る。

王国宰相として、王子であるユーリと接する機会が多かったベルマール。レザール戦争後、辺境の村で浮世離れた生活を送っていたユーリは、まさかベルマールがキールで未だに生きているとは思っていなかった。自分以外の王族関係者は皆殺しにされたと——

「生きていた……のか——」

「ええ、私はエスクード王族ではありませんから……王族は皆——殺されてしまった。それでもユーリ、貴方が生きていてくれるだけで、私はもう何もいらない」

しばしの間、突然の再会に郷愁を抱く二人。

「男同士の抱擁は長い間見るに耐えんな。おい、ベルマール、ユーリは私の物だぞ、いい加減離れろ」

「いつユーリが貴女の物に？ ソフィア様にシャルを取られた腹いせですか？」

「ちちち違う！ ストレートに言うな阿呆！」

「いやはや、これ失敬致しました。魔女イゾルデともあろう方がこの程度の事で狼狽するとは思わなかったものでして――」

怪しげな笑みを浮かべ、イゾルデを見るベルマール。

「これだからお前は嫌なんだ。口八丁でお前に勝つなど不可能に近いからな」

「またまたご謙遜を。数百年を生きる貴女に私が口八丁で勝つなど、在り得ない事です」

「もういい、私の負けだ、面倒になってきた」

イゾルデは遂に開き直って両手を力なくベンチに垂れさせた。

「ふふ、貴女と話するのは退屈しなくて良いのですが、何分私の方もあり時間がないので。ユーリ、いきなりですが、貴方がキールに居る目的を教えてくださいますか？」

ユーリは二人のやり取りを見ていたが、ふと訊ねられて言葉を紡いだ。

「一つ、俺が数日前まで住んでいたエスクード辺境の村の人々をマズール騎士団の追手から逃がす事。もう一つは――」

一度言葉を切り、より強い声色で言う。

「エスクード王国を取り戻す事。最たる目的だ」

「――前者の方は既に手を打って置きました。マズール騎士団はあ

と二日程は村に対して身動きを取れないでしょう」

返ってきた言葉にユーリは驚く。その様子を見てベルマールは笑顔を湛え――

「貴方は解りやすいですからね。決意を固めた後は、このキールに来ると思っていました。大丈夫、後者の目的が果たされれば、結果的に村人たちは救われるでしょう。それまでの時間稼ぎをしたままです」

ベルマールがユーリの隣に腰掛ける。

「一応――訊ねさせてもらいますよ、ユーリ。シャルが最後に貴方に教えた『計画』を覚えていますか？」

「勿論。覚えてなければ此処にはいないよ」

「良かった。それで――『決行』は何時にするのです？」

「明日。出来るだけ早い方が良いな」

「解りました。材料を整えて置きましょう。私の胸に刻まれた誓約系の魔術も、イズルデに解除してもらったことですし」

イズルデが横から「お前からは金を貰うぞ」とだけ口を挟んだ。

「解ってますよ、後で差し上げます。ともかく、これで準備は整いました」

「俺がする事がまるでないな」

苦笑しながら言うユーリ。

「いいえ、貴方がいてこそ、シャルが密かに建てていた『計画』は意味を為すのです。これは唯の始まり。問題はその後どうするか、

ですよ——《陛下》」

「まだ早いよ、ベルマールさん。それにその呼ばれ方は慣れないからやめてくれ」

「ふふ、解りました。さて、時間もないので私はそろそろマズール王城に戻ります。また明日——」

「また明日——」

止まっていた齒車が、音を立てて回り始める。

亡国の亡霊が、身体を求める——

5話 「双国は西方で踊る」

次の日の朝、早々に就寝したりリアーナが真っ先に目覚め、微動だにせずに寝るユーリと、毛布をぐちゃぐちゃに蹴りながら寝ているイゾルデを見る。

「うわぁ…すごい対比…」

言葉では形容しがたい形に丸められたイゾルデの毛布を見ながら、つい言葉を零してしまう。どうやったらそんな形になるのかとまじまじと観察していると、イゾルデが寝言のように、不意に声を漏らした。

「あぁ…ユーリ…」

艶めかしい声色。身体をくねくねさせているイゾルデを見て、リアーナは咄嗟にイゾルデの脳天に手を振り下ろした。ぺちん、と軽快な音が鳴って、次にイゾルデが目を覚ます。

「んぁ…リアーナ？ 何故起こした、良い所だったのに——」

イゾルデの言葉を片っ端から無視し、次にユーリの身体を揺さぶるが、一向に起きる気配がない。

「まぁ…起きないよね…」

その間に、イゾルデが毛布を元の形に戻しながら、ベッドから抜け出す。大きな欠伸を湛えている姿を見る限り、俗に言われる魔女という印象は得られなかった。何処にでもいそうな、あるいは少し

珍しいタイプの、品行の悪い少女といった風で――

「ユーリは起きないのか？」

「ユーリって寝るとなかなか起きないからね。でも大丈夫、秘密の手段があるから」

ぐっ、と一度右手の親指を立ててイゾルデに見せ、リリアーナはユーリの耳元に口を近づけた。イゾルデが何をするのかと見物している中、彼女は小さな声で呟いた。

「ユーリ、あと三秒で私の料理が全部なくなっちゃうよ。一、二、三……あーあ、全部食べちゃった――」

「うわぁ！せめて一個だけは残しておいて！」

がばっと布団を蹴飛ばしつつ、上半身を凄まじい勢いで起きあがらせるユーリ。

「あれ……？ 料理なんてないぞ……？」

「ある訳無いじゃない。ここは宿だよ？」

謀ったなりリィ、と澄まし顔のリリアーナに毒づくユーリ。眠気眼を擦りながら、ベッドから完全に身体を起こし、覇気の無い声を上げる。自分を起こすかのように紡がれる意味を含まない言葉の羅列がある程度続き――

「はあ、あまり良い目覚めじゃないな……」

「起きないユーリが悪いんだよ」

「もっとマシな起こし方ってない？」

「これが最も優秀な起こし方だと個人的に自負しておりますの」

演技ぶって大仰な身振りを加え、一礼するリリアーナ。彼女が高貴振ると、簡素な動きでさえ絵になっていて――

「解ったよ、ちゃんと起きれるよう努力はするから――」

ユーリは渋々リリアーナの起こし方を容認するしかなかった。リリアーナは小さく笑い、次にユーリのベッドに上って、彼の背中側に同じ向きで座る。衣服のポケットから一本の黒い紐を取りだすと、ユーリの銀の髪を両手で纏め始めた。

「三つ編みでいい？」

「任せる。好きなようにしろ」

リリアーナは、ユーリの一際長い襟足の一房を器用に三つ編みにしていく。纏まった所で黒い紐で毛元を固定し、「はい、できた」と短く声を掛けた。

その一連の流れを見ていたイゾルデは、柔らかな微笑を浮かべながら――

「夫婦のようだな。だがそのポジションもいずれは私が――」

「何の争いをしているんだよ……まあいい、出来るだけ早く支度をして――宿を出よう」

「何か用事でもあるの？」

イゾルデは頷いたが、リリアーナは昨日の夜の事を知らない。そこでユーリは一言だけ、言葉を彼女に与えた。

「『エスクードを取り戻す』」

その言葉だけで、リリアーナはこれから何が起こるのかを理解し

た。彼が何をしようとしているのか。その言葉を発した時の、少し楽しそうな彼の顔。

「解った、直ぐに支度するね」

リリアーナは短い言葉で返答し、出来る限り彼の心中を脅かさないように努めた。既に彼は意識を集中させている。周りの物は一切見えていないのかもしれない。それ程重大な出来事が、これから先に起こるのだろう。

リリアーナはそう心の中で呟いて、すぐに身支度を整えた。



マズール王城——マズール王執務室。

一人の臣下が、唐突に重大な報せを持って来ていた。

「陛下、先日お話にありました《エスクードの末裔》がキール内部で捕縛されたという情報が——」

まず真っ先にマズール王は驚愕し、何故エスクードの末裔が態々キールにまで来ていたのか、という事について思考を巡らせた。

「何時頃、此処へ来る？」

「は。マズール騎士団長ケーネがすぐにも末裔を連れてくると。また、同時に連れ添っていたかの《魔女イゾルデ》と《エルフの少女》も同様に連行してくるようです」

「とんだ一行だな。異例の組み合わせにも程がある」

何か企んでいるな、とだけ頭の中に言葉として残し、マズール王は執務室の椅子から立ち上がった。

「宜しい、到着次第、謁見の間に通せと伝えよ」

「御意のままに」

まあいい、今更出来る事があるなら、やってみろ。と、マズール王も決心する。徹底的に交戦してやろうと。そして遂に会合が果たされる。亡国と仇国の会合が――



マズール王に一報が伝わる三十分前。

マズール王城内で人を探していたベルマールが、ようやく探し人を見つけ、声を掛けた。

「ケーネさん、此処にいましたか」

王城の廊下の向こう側で、ケーネが驚いたように振り向く。すると、同時に駆け寄ってきた。

「ベルマール様！態々お越しにならなくても呼んで頂ければ私が向かいましたのに！」

必死の形相でそう言うケーネの額をベルマールが小突いた。整った顔が悪戯気に歪む。

「いえいえ、貴方は忙しい身ですから。私なんか気を遣わなくてもいいのですよ。そ、れ、に！貴方最近王都で女性と会っているそうではないですか！私に裂いている時間なんてないでしょう！いやあってはならない！」

「…貴方が言いたかったのは最後の台詞だけでしょに…」

うんざりしたようにケーネは項垂れた。何処で仕入れたかは知らないが、労働時間外の情報まで知られている事に多少の恐怖を感じる。対して、嬉しそうに微笑むベルマール。

「うっふっふ、いずれは奥方になるんでしょうかねえ、楽しみです
ねえ。ご結婚為されたらどうぞ私を呼んで——」

「つ——で！要件はなんですか！」

放っておくと止まりそうもない悪戯気な皮肉を大声でかき消すケーネ。すれ違う部下達も耳をそばだてている。ベルマールはケーネの大声に多少引きさがりながら、表情を一変させた。

「ま、このくらいにしておいてあげましょうか。要件と言うのはです
ね——昨日例のエスクードの末裔を見かけたのですよ。この街で。
夜分遅かったのに何をしていたんでしょうねえ」

「その台詞、そのままそっくり貴方にお返しします。ベルマール様、
また夜分遅くに城を抜け出しましたね：門兵は止めなかったのです
か」

「彼らの秘密は私の手の中ですので」

ベルマールが手の中で何かを転がすような仕草を見せると、ケーネはもう一度項垂れた。しかし、すぐに姿勢を正してベルマールの言葉を反芻させる。

「…それで、その後の彼の動向は掴めましたか？」

「いいえ。しかし、彼は銀髪に紅眼、日が差している間は多分に目
立つ。もし王城前を歩いていたら簡単に見つかるでしょう」

最後の台詞に並々ならぬ意志が込められていた事に、ケーネは疑

念を抱いた。

「まさか…向こうから敵の本拠地に向かってくるなど…」

「ありえない話ではないですよ。第一王城に用がないならキールに
なんて来ません。彼がエスクード王家の末裔なら尚更です。今から
でも遅くはありません。様子を見てきたらどうです？」

思案気なケーネ。少しの間考えていたが、思い立ったような表情
を浮かべて、姿勢を正して言った。

「では、行って参ります」

「よろしい。もし見つけたら陛下の前に連れて行くのを忘れずに…」
「御意」

踵を返して走り去るケーネを、ベルマールは後ろから悲しそうな
目でずっと眺めていた。



ケーネが王城の門に辿りついた時、其処には驚くべき光景が広が
っていた。

『銀髪紅眼の青年』が、門兵に拘束されていたのだ。隣には同じ
ように拘束されている美しい少女と――先日、秘密裏な王命で辺境
の住処諸共焼き払ったはずの《魔女イゾルデ》。

「ケーネ様、この者がエスクードの末裔を語ったので連れの者共々、
一時拘束しました。真偽の程は確かではありませんが…如何いたし
ますか」

「あ、ああ。その者の言っている事はおそらく真実だ。私が陛下の
元に連れて行く。ご苦労だった」

「は、それでは縄を――」

門兵はきびきびとした動きで敬礼をし、三人を拘束している縄を渡した。

「ところで――被害はなかったか？」

「いえ、抵抗をしなかったので被害はありません」

抵抗をしなかった。第一、何故無抵抗で衛兵に捕まる？ 捕まりにきた、いや、その先に何かが――考えを巡らせるケーネ。胸中に何かひっかかる物を感じたが、とりあえず三人をマズール王の元へ連れて行くことにした。



「…マズール騎士団長と見受ける」
ケーネ・ヴァスカンド

王城の通路を三人を連れて歩いていると、ユーリが突然話しかけた。本来、問いに答える義務などケーネにはなかったが、特に支障もないだろうと思い、口を開いた。

「いかにも」

「そうか――先日の件では部下に悪い事をしたな」

「いや…」

ケーネは部下に、報告に関しては偽りなく、細部に至るまで説明するよう指示している。報告を基にすると、その件ではどちらかと言うと騎士団の方に非があると思っていた。無抵抗の老婆を先に一人切り殺した。どう見ても非は騎士団にあるのだ。その事に対し、我ながら激怒したのを覚えている。納税をしていなかったとはいえ、

その程度で殺されるいわれはない。当事者であるこの青年ならば、より強くそう思うだろう。

それが何だ。

本来敵対しているはずのマズール騎士を数人切り殺した事を謝ってくるとは。

そう改めて思った瞬間――

ケーネは己の価値観が揺らぐのを感じた。

自分の動揺を悟らせる訳にはいかない。仮にも騎士団長と言う立場にいる人間が、立场上敵対している者に弱みを見せることはあってはならない。

それ以上会話することなく、黙ってケーネは三人を謁見の間まで連れて行った。



ベルマールさんが言っていたのは彼の事か、とユーリは内心でほくそ笑む。昨日ベルマールと話をした際、少しでもこのマズール騎士団長の話を聞いていた。それ故に、興味も抱いていた。

一連のやり取りの中で、ユーリはケーネ自身が自分の立場と考える狭間に一筋の矛盾を抱き、動揺したことに気付いていた。とはいえ、この場でこれ以上物事を混乱させるのも得策ではない。そう思い、ユーリがそれ以上彼に対して言葉を紡ぐ事はなかった。

ケーネに連れられて行ったのはマズール王城の謁見の間。扉は巨大で、開けることすら躊躇われるほどに威厳が漂っていた。

当然か、とユーリは心の内で言う。この中にはマズール王がいるのだから。扉の前に着くと、ケーネが声を張り上げた。

「陛下、例の者を連れて参りました！」

少しの間があつて、中から「入れ」という声が聞こえる。ケーネはその言葉を受けて謁見の間の扉を開けた。

開かれる視界。真っ直ぐに玉座に伸びる煌びやかな赤の絨毯。そしてその絨毯の先――悠然と玉座に座る――マズール王。

ユーリの胸は、此処でも思ひのほか高ぶりはしなかった。

状況を合理的に判断出来るのならばそれでいいか、と軽く内心の危惧を受け流し、謁見の間に足を踏み入れた。数歩歩いて顔を上げる。その様子に気付いたマズール王が先に言葉を放った。

「貴様がエスクード王家の末裔か」

「ああ、いかにも」

遂に顔を合わせる両者。片や玉座から見下ろし、片や縄に縛られながら上を向く。これが今現在の立場の違い。レザール戦争で違えた、道筋の差。

「本当に生きていたとはな――正直驚いている」

「そうか、驚かせる事が出来て良かった――」

毒の籠った声色で軽口を叩くユーリ。当然と言えば当然か、と隣で王に対して跪くケーネは胸中で語る。忌まわしき一族の仇が目の前にいるのだから。

そこでマズール王はケーネに語りかけた。

「御苦労だった、ケーネ。此処からは私が引き受ける。下がれ」

「はっ」

軍人にとって、少なくともこのマズール王国において、王の命令

は絶対。その場に残って経緯を見たいという気持ちも少なからずあったが、王に促されれば謁見の間を立ち去るしか術はない。

踵を返した所で王の隣に立っているベルマールから声が掛かった。

「ケーネさん、お時間があつたら私の執務室にお行きなさい。机に例の突風帯ハリネについての資料が置いてあります。読んでみる事をお勧めしますよ」

「御意のままに」

一度頭を垂れて、ケーネは謁見の間を出て行った。



「さて、邪魔者はいなくなった。何かするなら今だぞ？ エスクード王家の末裔よ」

ケーネが出て行った所で、マズール王は顔に笑みを貼り付けて、灰色の髭をなぞりながらそう言った。続けて――

「そして魔女イゾルデ。お前もな。住処諸共焼き払ったのだが――さすがに死なぬか」

「当然だ、『小僧』。あの程度で死ぬのならとつくの昔にくたばっておったわ」

「正に。悪運の強い奴だ」

次にマズール王は玉座の上からリリアーナに視線を移す。

「エルフか。やはりエスクードはエルフと繋がっていたのだな」
「貴様が知った所で、意味はない」

ユーリが口を挟む。

「否、ある。エルフが旧エスクード領に住みついているという事実が解れば、それは問題になる。全勢力を以て、ヴァンガードがそれを消しに来るだろう。その際に隣国として物的支援を送らねばならないマズール王国の王である私には、大いに関係がある事象だ」

「否、それにも意味は無い」

今度はユーリが言葉を紡ぐ。

「旧エスクード領は、貴様の物ではないからだ」

その言葉にマズール王は顔を顰めた。しかしその表情を悟られないうちに、即座に慚然とした態度を湛え、ユーリに言う。

「何を馬鹿な。貴様の父は、第三次レザール戦争で我らに捕まり、負けを認め、国家権利を我らに引き渡した。誓約書に王印で押印をさせたのだ。それが戦争で勝ち得た者の権利であり、国家間の暗黙の了解。よって、エスクードはもはや存在しない。貴様が王子である事さえ、もはや意味のない事だ」

「そう、暗黙の了解。だがそこには厳然たる事実が存在する。貴様父に王印を押させた所で勝ちを確信したようだが――それで終わりじゃない。どこの国も、その後全てを確認した上で、初めて勝ちを確信する。マズール王、貴様は侵略者として半人前だったんだよ――」

「何を――」

ユーリは己の口角がつり上がるのを感じていた。今頃になって、感情が昂ぶり始める。

「聞け、貴様は最後の最後で気を抜いた。国家権利譲渡の誓約書を持って来い。教えてやろう、貴様の愚を――」

マズール王は恐ろしい笑みを浮かべるユーリを前にして、肝が冷えた。恐ろしい目つき。今にも喰い殺さんとしてくる獣のような。

「安心しろ。取って破いたりはない――第一、縄に拘束されているからな」

その一言が後押しとなって、ユーリの言葉が気になっていた事もあり、マズール王はベルマールに誓約書を持ってこさせる。

「持って来い」

「御意のままに」

隣に控えていたベルマールが動いたのを見て、ユーリは残忍な笑みを密かに浮かべていた。

少し経って、ベルマールが金糸の髪を揺らしながら誓約書を持ってくる。マズール王はそれを受け取ってユーリに見えるように翻した。

「これだ」

ユーリは契約書をまじまじと見て、遂に、堪え切れらないと言わんばかりに、くっくっ、と声を漏らした。

「それだ、それだよマズール王。一つ良い事を教えてあげよう。その契約書の王印……」



「線が一本足りないんだ」



マズール王の驚愕した顔は忘れないだろう。こぼれんばかりに目を見開いたマズール王は、契約書を翻してまじまじと王印を見た。エスクード王国の紋章である竜の肖像画描かれている。ユーリに言われた通り、細部を観察するが、一見しただけでは細かい線の有無など解らない。

すると――隣から妖しげな笑みを浮かべたベルマールが何かを手渡した。

「陛下、これが本物のエスクード王家の王印で御座います。此処に別の紙面をご用意致しました。押印し、比べてみれば一目瞭然で御座いましょう」

マズール王は半ば放心状態で、言われるがままに王印を紙面に押した。そして比べる。並ぶ二つの王印。ベルマールが改めて押した方の王印を指さして言った。

「陛下、どうやら本物の王印は此処に一本線が入るようです」

ベルマールが指さしたのは、横を向く竜の肖像の翼付近。その大翼の模様が一本、確かに描かれていなかった。

なるほど、これは一本取られましたね、とベルマールが笑みを浮かべてマズール王に言い聞かせた。

「西国の元首ならば、皆どちらが本物のエスクード王印なのか知っている事でしょう。暗黙の了解というのは、そこに至るまでの確か

な実証と、公平さの上に成り立つのです」

故に、各国共に、王しか持たない《印》を各国元首にのみ公開する。各国の元首が、絶対に忘れてはならない形。王印の象形。忘れれば、もはや暗黙の了解など意味を為さない。遙か昔より、戦争という暴力の所業、混沌とした所業の中の唯一の矜持にして唯一の公平さだった。

勿論、過去に王印を外部に漏らしたり、複製を試みようとした王は居たが、皆が皆あまりいい末路は辿らなかった。踏み込んではない一線を越えた者は、周辺各国、はたまた己の部下にまで限りを付けられた程である。元より、王印はその国にしか作れない素材、技法を使い、作成される。その素材も技法も国家の極秘事項。知る者は一握りしかない。前述した条件も重なり、西国では未だにその暗黙の了解の前提が破られた事はなかった。

「ともあれ、陛下、貴方もエスクードの王印を知る内の一人で御座います。貴方は王位を継承するに当たって、最初に他国の王印を細部に至るまで記憶した。それが義務だった。故に、貴方は知っている筈だった。あの時、エスクード王が押した王印が、偽物である事を。しかし貴方は、エスクード王に王印を押させた所で気を抜いてしまった。その結果がこれです。もう一度言います、よく御聞きください。この誓約書に押された王印は《偽物》です」

◆◆
「これでは誓約書は効力を発揮しませんね」

◆◆
「馬鹿な！」

吠える。そして己の内に答えを探す。果たして慢心があったのか。エスクード王直々に王印を押させた当時の事を思い出した。頑なに自国を守ろうとしていたあの屈強なエスクード王が、何故誓約に際して、あんなにも簡単に王印を振り下ろしたのか。当時は剣を突きつけられた状況下に居た為、さすがのエスクード王も判断が狂ったのかと思っていた。自分の命が握られている状況下で、頑固等言っている物でもなく、為されるがままにそうしたのかと―――思っていた。

だが違う。アレがそんな弱者であったか。

今、この状況は、あの第三次レザール戦争の続きだった。まだ戦いは終わっていない。

その意味が今更ながら解ってきて、マズール王はいつそ清々しい程に度肝を抜かされた。しかし何時までもそうしては居られない。徐々に状況の変化に気付き始める。

手に持ったエスクードの王印を地面に叩きつけようとしたが、ベルマールに抑えられた。

「陛下、いけません。これは大切な『証拠』なのですから」

ベルマールの妖しげな笑みの意味に気付くマズール王。

「ありえん！貴様の持ち物は私の宰相にした時に全て没収した！何故こんなものを持っている！」

「いやはや、私も捕まった時にうっかりしていました：ついエスクード王から受け取った王印を飲み込んでしまったのですよ。貴方の監視が外れた時に慌てて吐きだしましたがね。あれは辛かった――」

わざとらしく、大仰に身振り手振りで事の詳細を告げるベルマー。追撃と言わんばかりにユーリが言葉を紡いだ。

「つまり、だ。マズール王よ。誓約書が効力を発揮していないと言う事は：今もエスクードは領地だけで存在している、という事と同義だ。お前が今まで騎士団を使って行っていたエスクード領の『管理』というのは、言い替えれば――列記とした『弱者に対する侵略行為』となるわけだ。この意味が解るか？」

侵略。暴力を糧とした行為。他国の領土を侵したという事実。それだけが問題なのではない。大国マズールが、現状、防衛力を持たないエスクード王国を侵略したと言う図柄が一番問題なのだ。エスクード王国が生きていたならば、この現状は非常に不味い。自然資源の採取の為、土地管理を行わせているマズール騎士団。その姿が一変し、自然資源の略奪の為、防衛力のないエスクード王国に無断に侵入し、搾取する相貌になる。端的に言い換えるのなら、それは少なくとも――この西方諸国からすれば忌避されるべき狡く下卑た行為だった。

そしてこの関係が問題となる所以が周辺各国にある。現状、ヴァンガード協定連合に加盟しているマズールは、今や周辺各国には手を出せないレベルの大国である。故に、周辺各国は外交手段を使い、マズールと和平を結んでいる。マズールの方も、さらなる経済の潤滑が見込める和平は望む所だった。

しかし、だ。この状況でマズール王国がエスクード王国を侵略していた事を周辺各国に知られれば、和平状態は即刻敵対状態へと移行するだろう。何故なら『エスクード王国を密かに侵略していたマズール王国は、いずれ自分達の領土にもその手を伸ばすかもしれない』と思わざるを得ないからだ。一度やれば二度目がある事を誰もが予想する。次の対象が自国になるかもしれない。ならば、いっそのこと和平を解消し、周辺各国と結託してそんな危険国は排除して

しまおう、と思う可能性すらある。仮にマズールに勝ちえなくとも、このまま一方的に搾取される側に回るくらいなら、せめて一矢報いてやろうという気になるかもしれない。

確実なのは――外交上の信頼が地に落ちる事。この事実が大陸の経済の大部分を動かしている『中央諸国』に知られれば、経済政策という形で攻撃される可能性もある。いわば孤立無援。

その転機が、今此処に訪れている事に気付くマズール王。

瞬間、目の前のエスクード王家の末裔と、隣で残忍に笑っている自らの宰相に、多大なる怒りが湧いた。

「し、しかし！王印を偽ったのは貴様らだ！それは各国に責められぬ物ではないのか！」

「違いますよ、陛下。偽物である事を確認するまでが貴方の義務だった。各国の認識は変わりません。偽物を振り下ろしたエスクード王ではなく、偽物を偽物と気付けなかったマズール王の負けである、誰もが口を揃えるでしょう。何故なら、西方諸国においても『二度』の前例があるからです」

確かに、前例があった。故に、各国の元首は認識を変えないだろう。非は私に在る、と。何を言っているのか。私ですら、他国同士が同じ展開になれば、義務を怠った元首を責める。

だがそれを理解した所で、マズール王の怒りは収まらなかった。その怒りには、自分に向けられる怒りも含まれている。

そして――大吼。

◆◆◆
「謀りおったな――貴様等！」

双国は踊る。

6話 「王剣は仇国に閃く」

ケーネは謁見の間を出る際にベルマールに言われた言葉を忠実に実行に移していた。ベルマールの部屋の扉の鍵は開いていて、すんなりと中に入る。それでも、一応「失礼します」とだけ呟いて、歩を進めた。

瞬間、目に入る机の上の分厚い本。半開きのまま置かれていた。中を覗き込んで見ると、丁度、話に聞いた突風帯^{ハリネ}について書かれていたので、読み始めた。

そして、読み進めて行くにつれ、ある真実に行き着く。

自分の手に意志とは関係なく力が入るのが解った。

「――ハリネとは……エスクード各地を転々とする突風帯ではなく――」

エスクード王国北部にのみ、それも冬にのみ吹く突風である。ブリザードを伴って吹く事が多いため、冬に育つ作物の類は被害を受けやすい。

「毎年猛威を奮うため、近年、畏怖を含めてつけられた名である――」

例の村は旧エスクード南部に位置している。旧エスクード領の東に位置するマズールから村へ進行するのに際し、ハリネという突風が邪魔をすることなどまづない。

ケーネはその事実に気付いた時、手に持っていた本を投げ捨て、部屋から飛び出した。王城の廊下を走りながら、考えを巡らせる。何故態々『でまかせ』を伝えてまで、マズール騎士団の出発を遅らせた。理由は一つ、それはあの末裔の為。身を挺してまで村を守る

うとしたのだ。村への追撃の事を考えないわけがない。それを先んじて読んだベルマール様の策。

それでも未だ、疑念は残る。なら何故、そうなることを読み切っていないながら、数日という短い期間だけ遅らせた。

それは数日あれば、その進行を完全に停止させるだけの策があったから。

いや、末裔が村を出る事は必然ではなかった筈。何故それで数日という短い期間を遅らせた。

まさかベルマール様は末裔がキールへ向かうことすら読み切っていたのか。圧巻の一言に尽きる。しかし、策と言っても今日まで彼らが顔を合わせた事などない――

いや、そう言えば昨日、ベルマールは夜分遅くに外出し、そこで末裔を見かけたという。その時に何か打ち合わせをしたのか。そんな短い時間で。

ともかく――何故気付かなかった。短絡的に見れば、信じたくはなくてもベルマール様は末裔の味方である可能性が高い。それもそうか、彼らは旧エスクード王国において王子と王国宰相と言う立場関係。接触は幼少時から多々あったろう。

そして今、あの末裔――ユーリ・ロード・エスクードとその連れのエルフの娘、さらに魔女イゾルデ、ベルマール様、そして王は謁見の間に五人だけ。単純に見れば一対四。

何があってもおかしくはない。何故もっと早く危惧しなかった。

「陛下――！」

早く、早くと吐きだしながら、謁見の間を目指して走り続けるケ―ネ。額から溢れだす冷や汗が止まらなかった。



「今更気付いたのか……遅いな」

「貴様ッ！」

マズール王は玉座から立ち上がってユーリに吠えた。そして、隣にいるベルマールに咄嗟に命令を投げる。怒りに支配される声色。見事に謀られた事に対する怒りで、自らの顔を赤く染め――

「ベルマール！ 奴を殺せ！」

「残念ですね、陛下。私には命令の遵守という誓約は設けられておりません」

「私に逆らうのか！」

「ああ――そういう言い方をすれば『もしかしたら』貴方の命令を実行に移していたかもしれませんね」

「なにッ！？」

そう言っベルマールは徐に簡素な上半身の服を脱ぎ、マズール王に左胸の肌を見せた。

「誓約の魔法陣が――！」

「ええ、魔女イゾルデはその名の通り優秀な魔術師でありまして。彼女に誓約の魔術を無効化して頂きました。そして故に――もう貴方の犬ではなくなりました。残念です」

――と言いつつも、ベルマールは悲しむ所か、全く笑みを崩さなかった。

「くっ！ ならば貴様ごと――！」

すると、マズール王は玉座の背元に立て掛けてあった剣の鞘を掴み、剣の柄を握って鞘から抜き放った。

「陛下、私めに武力で勝とう等と御思いですか？　それでも私はかの戦神と謳われた男の宰相をしていた男ですよ」

鋭い眼光。怪しい笑みを浮かべていたベルマールは既に其処には居なかった。代わりに、エスクード王の右腕として猛威を奮っていた頃のベルマールが姿を現していた。凄まじい覇気と威圧の波動。気圧され。圧倒的な力量差が雰囲気としてマズール王に伝わる。気圧されたマズール王は苦し紛れと言わんばかりに玉座から飛び降り、縄で縛られているユーリを目がけて走りだした。その様子を見てベルマールがまた笑う。

「陛下、その青年もまた、戦神の一人息子です。更には――貴方の良く知るレザール戦争をエスクード側、それも最も執拗に狙われた王族として生き抜いた圧倒的強者です。お気を付けを――」

その言葉を聞いているのかいないのか、マズール王はお構いなしと言わんばかりに駆ける速度に拍車を掛け、ユーリに向かって行った。横に剣を振りかぶり、ユーリの心臓目がけて剣を振る。剣の間合いが深くなり、顔と顔が近付いた。

ユーリは笑っていた。縄で縛られ、身動きが取れない状況での剣撃を打ちだされているというのにも関わらず。

しかし、その笑みの結果は直ぐに明らかになる。

次の瞬間――ユーリは縄による拘束を内からの腕力のみで引き千切り、完全に自由の状態でマズール王とギリギリで相対していた。心臓部目がけて横に奮われた剣の動きを、柄を掴むマズール王の手を蹴り飛ばす事で、支点位置から止めて見せる。

蹴りの衝撃で尻餅をつくマズール王。再び斬りかかろうと、ふと

視線をユーリの顔に向けた時、心臓が高鳴った。嫌な高鳴りだった。

——金色の右瞳。縦に割れている瞳孔。人間ではない、何かの瞳。視線。

自分が捕食される側に回ったという否応ない諦観が心中を支配し始める。

これ以上この男に近づいてはいけないと、本能が叫んでいた。

「なんだ、来ないのか」

対して、つまらなそうに呟くユーリ。今の一連の攻防の中で、左掌から剣を抜き放っていた。儀礼用と見間違えう程の美しい装飾が施された柄、柄頭の付近に刻まれている、竜を象ったエスクード紋章

「《エスクード王剣》…」

マズール王はその剣を見て、体中から冷や汗が^{ほとばし}るのを感じた。エスクード王剣。エスクード王国に於いて、権力を主張する唯一の剣。力の権化。王冠と同じような物だった。本来なら、前エスクード王が持っていた物。

「何故それを貴様が持っている——確かにあの時、エスクード王から奪い取った筈…」

「ああ、我が父はマズール王国がヴァンガード協定連合に加入したのを知った時、負けを悟っていた。だから——第三次レザール戦争に踏み切るに差し当たり、王印をベルマルさんに、王剣を俺に渡しておいたんだ。お前が奪ったエスクード王国の貴重品は全てが全て、偽物さ。問おう——貴様の奪ったエスクード王剣は異様に簡単

に折れなかったか？ 刃の閃きは鈍くなかったか？ 装飾は拙くなかったか？ ——それでも気付かなかったのか：『愚鈍な奴め』」

最後に有りつ丈の皮肉を込めた言葉を付け加える。その言葉を受けたマズール王の怒りは頂点に達していた。怯えも、恐れも、怒りが掻き消す。

「何故…何故！ お前はそれ程に私の前に立ちほだから！ 忌々しいエスクード王よ！」

マズール王が叫んだ瞬間、ユーリの体がゆらりと陽炎のように揺れ、一步、マズール王へと歩を進めていた。マズール王と間近で相対して、これまで比較的穏やかだったユーリの心が沸々と燃え上がり始めていた。錆びたと思っていた復讐心が雄叫びを上げる。

「殺しはしない。正直な所、今すぐ八つ裂きにしてやりたいと思わないでもない。だが、その行動が後々俺に災厄を齎すだろうとも思う。故に——『遊んでやろう』、マズール王よ」

マズール王は背筋の悪寒を感じて、なけなしの戦闘本能のままに咄嗟に剣を構えた。その手に持つのはマズール王剣。マズール王の王冠と共に、権力を象徴する剣。権力を『象徴するだけ』の剣。立ち上がり、マズール王剣を構えたマズール王を見て、それを待ちわびていたかのように、ユーリも同じように剣を正眼に構える。

「マズール王よ、我が父のシャル・デルニエ・エスクード智略が貴様に打ち勝った証明として、その手に持つマズール王剣を斬り落す。しかと見届けよ、エスクード王剣の本来の切れ味と——その閃きを！」

踏み込み、中段からの横一闪。剣筋は凄まじい速力を伴い、マズ

ール王の視界から消える。

そして次の瞬間には――金属同士が弾ける甲高い音すら鳴らずに、マズール王が縦に構えていたマズール王剣が、刀身半ばから真つ二つに斬り飛ばされていた。

剣と剣同士の衝突。だのにも関わらず、音すら鳴らずに斬り落とされたマズール王剣。王剣の切れ味の違い、そして剣を扱う者としての力量の差は明らかだった。斬り飛ばされたマズール王剣の片割れは、マズール王の背後の玉座に突き刺さる。

膝から崩れ落ちるマズール王。身体ではなく、精神を斬られた。諦観。

「よくも――こんな鈍^{なまくら}で父を斬れた物だな。さぞ苦痛だったろうに――」

吐き捨てるようにユーリが言い、エスクード王剣を左掌の中に押し戻した。掌からは光が舞い散り、ユーリの右眼は金色に輝き続ける。

静寂が舞い戻る中、不意の来訪者がそこで姿を現した。

「陛下――！」

謁見の間の扉が勢いよく開き、その向こうからケーネの声が謁見の間に響き渡る。

「遅かったですね、ケーネさん」

「ベルマール様！ 一体これは……どういう事ですか！」

ケーネの視界に入ったのは、拘束が解かれたユーリの前で、折れたマズール王剣を片手に跪くマズール王。

そして、刃が突き刺さった玉座の隣で妖しげな微笑を浮かべるベ

ルマール。

ケーネの危惧していた事が、現実となった証拠でもあった。

「大丈夫、陛下を殺しはしませんよ。ねえ、ユーリ」

「ああ、そっちから向かってこなければな」

ユーリはリリアーナとイゾルデの縄を解きながらベルマールの言葉に答える。

「大丈夫だったか、リリィ、イゾルデ」

「うん、大丈夫」

「この程度、慣れた物だ」

——拘束を解かれた二人は、各々窮屈さに凝り固まった身体を解放するように背伸びをする。一悶着あったにも関わらず、二人ともその事を大して気にしていないようだった。

眼の前の光景から、状況を推理するケーネ。否、推理する程の物ですらない。事実、マズール王剣は折られ、王は跪いている。答えは一つしかない。

「ベルマール様——これは謀反です！ 何故ですか…貴方には王に逆らえぬよう誓約が施され——」

ベルマールは着直していた服をうんざりした様子でもう一度下ろす。肌蹴る左胸の肌。其処に刻まれている筈の誓約魔法陣が無い事に気付き、ケーネは合点する。

「誓約が解除されている…」

高度な誓約魔術だった。しかし、それを解除出来る力量を持つ者

が、一人だけこの場にいる。《魔女イゾルデ》。様々な事象がケーネの頭の中で繋がって行く。それでも、反逆の理由に関しては何も解らない。

いや——信じようとしていないだけだ。胸中の葛藤と戦っている最中、ベルマールが言葉を紡いでいた。

「貴方も良く知る様に、私は前エスクード王の側近にして王国宰相でした。私からすれば、敬愛する友を殺したマズール王は仇敵です。そんな私がマズール王の宰相として一生を過ごすと御思いですか？私の前で無残に殺された愛する友の願いを無視し、この場に留まると御思いですか？」

ベルマールが鋭い視線と、咎めるような声色で告げる。ケーネは、その言葉で万事に納得できてしまう自分が嫌になった。

「それでも——」

ケーネが何かを言おうとするが、それをベルマールが遮る。

「私としては、貴方の方にこそ問いたい。御自分の信念を曲げてまで仕える価値が、このマズール王、そしてマズール王国に有ると御思いになりますか？」

「…」

ケーネは言葉を紡げない。ユーリと会話した時の、価値観の揺らぎが再び心に襲いかかった。ケーネの言葉を待つベルマール。

「それでも、今の私は——マズール騎士団長というマズール王国の剣です」

それ以上は言えなかった。

すると、ユーリが二人の会話の最中に、リリアーナとイゾルデを連れて謁見の間を出ようとする。しかし、ケーネはそれを良しとはしなかった。扉の前で両手を広げて立ちはだかる。

「通す事は出来ない」

「ならば押し通るまで。イゾルデ、リリィを頼む――」

「私の出番はないのか？ 家を焼き払われた恨みが、マズール騎士団にはあるのだから」

「全ての一步は俺が踏まなければならない。だから、今だけは俺の我儘を聞いてくれ」

ユーリの、臨戦態勢とも言える冷徹なまでの無表情を見て、イゾルデは大人しく引き下がった。

「仕方ない、今日の所はくれてやる。お前の力を見せて貰おう。戦神の息子である事を、その力で示して見せろ。仮にも相手はマズール騎士団を率いる男。先程の王とは違い、手強いぞ」

「言われなくても――ベルマールさん、剣をもう一振り貸してくれるか？」

「ええ、構いませんが――」

ユーリが再び左掌から光と共にエスクード王剣を抜き放ちながら、不意にベルマールに声を投げ掛けた。ベルマールはユーリの言葉を受け、腰に佩いていた剣を鞘ごとユーリに投げて渡す。ユーリはエスクード王剣を片手で持ちながら、ベルマールから受け取った鞘から剣を抜き放ち、逆の手に持った。

「二刀流が本来の戦闘法か？ シャルとは違うな。あやつは歴代エスクード王と同じ一刀流だった」

「俺のは我流だ――」

一方のケーネは、腰に佩いた剣を同様に抜き放ち、上段に構えて臨戦態勢に入っていた。ユーリは両の手に持つ剣を、其々だらりと力なく持っていた。構えと呼べる物ではない。剣の切っ先が床を擦り、嫌な音を奏でている。

「構えないのか？」

ケーネが咄嗟に言葉を発していた。その言葉に、ユーリは不気味な笑みを浮かべ――

真正面からケーネに猛突していた。凄まじい速力。支点となったユーリの足元の金属鉋床が――抉れていた。

大理石だぞ、とケーネが内心で信じられないといった声を上げる。一瞬にして懷に踏み込んできたユーリに対し、多少遅れながらも迷いなく上段に構えた剣を振り下ろす。対するユーリは、流麗な動きでケーネの懷の中で身体をのけ反らせ、その状態から金属鉋床を足の支点にし、横に回転する。異様な身体駆動。柔らかく、強靱で、速い。回転によって、ユーリの持つ二本の剣が凄まじい早さで振り抜かれる。左手の剣で狭い空間に上段から迫り来たケーネの剣を弾き飛ばし、さらに右手の剣で体勢を崩したケーネの胴部に斬撃を繰り出す。

しかし、ケーネの身体もそれに反応していた。胴部に迫った斬撃を後ろに一步引く事で避ける。剣が弾き飛ばされた事による力の慣性を使った柔軟な動きだった。

ユーリは両手を剣を持ったまま地面に着ける事で身体の回転を止め、そのまま手を支点に飛び上がって一回転し、床に足を着ける。曲芸師のような、あるいは軽業師のような身軽な動き。しかし、その様相とは裏腹に、ケーネの手には重い感触が残っていた。両手で持っていた一本の剣が、しかも上から振り下ろしたのにも関わらず、

片手での斬撃で弾き飛ばされた。回転によって威力が増大していたにしても異常だった。

凄まじい腕力と速さだ、と素直に驚嘆する。

対するユーリは――

「よく剣を手放さなかったな。良い腕と剣だ」

と、感嘆したように。

ケーネはその上層からの言葉を受けても、嫌だとは感じなかった。むしろ嬉しくすらある。それは恐らく、本能的に彼が自分より高みに居ると言う事を悟ってしまったから。眼の前のエスクード王家の末裔が、レザール戦争を生き抜いた強者である事を頭と身体に理解させた。

そして再び、剣を構える。

「敬意を表そう」

不意に、ユーリが言葉を紡いだ。そして同時に、相対するケーネはユーリの纏う雰囲気が変わった事を知る。臨戦態勢に入る事で露わになったユーリの放つ空気。

洗練された冷たい殺意の波動だった。

金色の右眼と深紅の左眼がその異質さを助長させる。先程とは違い、まるで感情や表情と言った物を映さない眼。

殺すか殺されるかの状況に一体どれほど長い間身を置けば、こんな眼になるのか。そう考えた時、ケーネの背筋が悪寒を感じていた。未だに佇んだまま動かぬユーリ。

上段に剣を構えたまま動けないケーネ。

ケーネの息が上がり始める。駄目だ、動け。殺らねば殺られる。そう思った瞬間に、ケーネは己の剣にルーン文字で刻まれている

《魔術式》の起動詠唱を唱えていた。

「全てを燃やし尽くす業火、その身を以て、刃に閃け――」

ケーネの持つ剣の腹に刻まれた複数のルーン文字が、ケーネからの魔力供給を受けて光輝いた。数瞬して、剣の刀身から渦巻く真つ赤な炎が燃え盛る。業火を纏う刀身。バチバチ、と炎の燃え盛る音が謁見の間に響いた。

それでも、ユーリの表情に変化はなかった。ケーネは炎を纏う剣を中段に構え直す。

そして、今度はケーネから仕掛けていた。

剣を両手に持ち、中段脇構えのままユーリの斜め前方から円を描くように走り寄る。片足を踏み込み、鋭い斬撃を繰り出した。炎に包まれた刀身が、赤い軌跡を描く。

ユーリは片方の剣でその斬撃を軽々と受け止めるが――ケーネの炎の剣はそのユーリの剣諸共じりじりとユーリの身体に迫っていた。ケーネの業火の剣が、ユーリの剣を溶かし始めていた。それに勘付いた様子のユーリは、咄嗟にその場から跳躍し、大きく距離を取る。ケーネの剣を受け止めた方の剣――王剣ではなく、ベルマールから受け取った方の剣――を見ると、刀身の腹の半分が溶けていた。

その様子を遠くから見ていたイズルデが、感嘆の声を上げる。

「中々どうして、良い魔術師でもあるようだ。剣に刻まれている魔術式はかなり魔力を喰う筈だが、なんなく発動させよる。その上、剣の腕も良い。マズールに置いて置くには勿体ない人材だな」

ユーリはその間に半分溶けた剣をその場に捨て、動き出していた。再びの高速移動。逐一ケーネの死角に入る込むように、回り込みながら近づいて行く。ケーネからすれば、その速力も相まって、まるで姿その物が消えているようだった。

見えない。――化物め。そう心の中で呟いていた。

大理石を強烈な踏み込みで壊しながら、死神が迫る。音を頼りに振り向くが、振り向いた時には既にユーリは移動している。そうしている内に、音が傍らまで迫り――

ケーネの腹部に、エスクード王剣による斬撃ではなく、掌底が繰り出されていた。視界がぶれ、腹部の強烈な衝撃に息が止まる。

「がッ――」

訳も解らないまま身体が浮遊感を得て、次いで背中に強い衝撃が走った。

ユーリの掌底は、人一人を軽々と浮き上がらせる。衝撃は鎧を貫通し、背部を突き抜け、ケーネを謁見の間の扉まで軽々と吹き飛ばした。謁見の間に響く轟音。

ケーネは背中から扉に衝突し、あまりの衝撃で止まってしまった呼吸をなんとか復活させようと、もがいた。

その間に、ユーリがケーネの傍まで歩みより、それまでの殺意を引っ込めて、言葉を紡いだ。

「イゾルデの言う通り、マズールに置いておくには惜しい人材だ。心に抱いている矛盾に決着をつけ、その後、望むならば――エスクードに來ると良い。氣に入った。よりよい返事を期待している。いずれ会う、その時まで」

ユーリはエスクード王剣を左掌へ再び戻し、踵を返す。

「行こう――」

ベルマール、イゾルデ、リリアーナに対し、声を投げ掛けた。そしてそのまま、ユーリは三人を引き連れ謁見の間を出て行く。

ケーネはもがきながら、扉を潜って行くユーリ達を見て、必死に

手を伸ばした。

待て、待ってくれ、と――

去り際に、ベルマールが悲しげな表情で言葉を置いて行く。

「ケーネさん。事の詳細は『陛下』に御聞きなさい。そして：それを聞いた上で、貴方がどう行動するかは貴方の自由です。私は在るべき場所に、居るべき場所に戻ります。マズール王を陛下と呼ぶのもこれで最後でしょう。貴方も、私に敬称を施す必要は以後、ありません。それと、この際ですから貴方が以前、私に問いかけた質問に答えましょう。もう隠す必要もないので。貴方は私に『何故貴方はそうも顔や体が衰えないのですか』と言いましたね。あの時ははぐらかしましたが――今はっきりと答えましょう。何故なら私は『長命のエルフト、人間の混血児だから』です。――それでは：いずれ、また会える事を祈っています」

ベルマールは最後に一言付け加えようとして、それを理性で押し留めた。

それは――いずれ時がくれば言える言葉。言う事になる言葉。その言葉がどちらの意味を持つのかは、まだ解らない。

――私が決める事ではないのだ。

茫然自失のまま虚空を見つめるマズール王と、倒れるケーネを謁見の間に残し、三人はその場を去った。

7話 「欠片は舞台に集う」

謁見の間か速やかに脱出するユーリ達。ベルマールが傍にいたおかげで、御得意の『でまかせ』と『甘言』で途中にすれ違った王城勤務者をなんとなく欺いて行く。結果、大した労力を伴わずに、ユーリ達は王城から脱出する事が出来た。

その後は人で溢れ返るキールの街中に姿を消し、追跡者を巻く。とはいえ、長居すればするほど、マズール王が精神的に回復した時に、自分達が泣きを見る事になるだろうとはユーリとて理解していた。マズール王が策を施してくる前に、このままキールを抜けだし、マズール王国から脱出した方が得策だろう。

ユーリ達はベルマールを伴い、一度適当な宿に部屋を取った。外でうろつくよりは、何処かの建物の中で話をした方が安全だろう。宿の部屋に澄まし顔で入り、ベルマールが衣服の胸の部分に着けていた――マズール紋章の刻まれた硬貨を適当に投げ捨てながら、言葉を紡いだ。

「さて、やるだけの事はやりました。後は――この後どうするかでしょうね。何か考えはあるのですか？ ユーリ」

一息つけて、ユーリが答える。

「行先は大凡決まっているよ。でもその前に、考えておかねばならない事がある。エスクードが未だに存在している事――滅亡していない事――が確定したが、今、現在、それを知るのはマズール王だけ。だが、いづれ周辺各国にも知れ渡るだろう。そこで生じる最も重大な問題は――」

一息ついて、続ける。

「エスクードが大々的な防衛力を持たない、と言う事だ。エスクード人はレザール戦争後、散り散りになってしまった。領地が存在しているとは言っても、その実、国として成り立っていない」

「ならば、今から王国へ戻りますか？ ユーリが王国へ戻り、エスクード王国が未だに存在している事を周辺各国へ知らせれば、散り散りになったエスクードの民達は王国へ戻ってくるでしょう」

「それは駄目だ」

ユーリは予めその答えを待っていたかのように首を横に振る。

「中途半端に国としての権威を取り戻してしまえば、再び『戦争』が確立してしまう。大々的な再興宣言をする時には、既に昔以上の力を持った状態でなければならない。マズール王国がヴァンガード協定連合に所属していて、大国である事は変わらないのだから。中途半端な状態で再び攻められれば、エスクードはもう立ち上がる事が出来なくなる」

「ならば如何に――」

「周辺各国に知れ渡る、と言ったが、その実、マズール王がその情報を流通させるまでに時間差が生まれるはずだ。何故ならマズール王は、マズール人としての気質故、一度は手に入れた物を他国へ掠め取られる事を嫌う。否、どの国の王でさえ、自然資源の宝庫であるエスクード領を手放したくはない」

国毎、そして民毎の気質差は確かにある。文化の発展の違いによる細分化。もしくは、初めからそうであったかのように。

「もしかすれば、エスクード自ら再興を宣言するまで彼は黙っているかもしれない。エスクードが再興宣言をするまでに戦力を整え、宣言と同時に公式に、他のどの国より速く攻める、という策を取る

事も考えられる」

「どちらが先か、という事ですか…」

ユーリの言わんとする事を理解するベルマール。勿論、彼自身その事には気付いていた。簡潔に、後に付属する言葉を述べる。

「マズールの戦力がエスクード再興宣言より先に整えば、マズール王は自らエスクードが滅亡していないという事実を周辺各国へ報せ、同時に攻め入る事も考えられる、と――」

「そう、だから俺達はマズール王国より早く、戦力を整えなければならぬ。策はある。まずはその最初の策が成立しなければ、エスクードは再び滅びるだろう」

自国の滅亡を、さも当り前のように述べてしまう辺りがユーリらしい。どちらかと言えば、ユーリは過程論よりも結果論を推し進めやすいのかもしれない。そうベルマールは胸中で一人ごちた。話の腰を折るのも蛇足な気がして、そのままユーリの言葉を引き出していく。

「それで、その策とは？」

ベルマールが訊ねた。

ユーリはその言葉を受け、襟を正し、ゆっくりと宣言する。

「他国と同盟を締結させる」

エスクード王国は独立王国だった。他国と貿易こそするものの、同盟という明確な繋がりには歴史上一度も締結させた事がない。他国の情勢に対し中立を貫いた王国である。故に、ユーリの言葉はベルマールとイゾルデに衝撃を齎した。

しかし、それこそがユーリの作り上げる新たなエスクード王国の第一歩である事も理解していた。

「エスクードの歴史を塗り替えるか——」

イズルデが少し楽しそうに笑みを浮かべ、ユーリに言う。

「当然だ。その為の布石を、父が命を賭けて蒔いたのだから。エスクードの理念も解る。だが、俺は——俺の理念を基に、エスクードを作り直す。歴代の王に罵倒されようとも、この決心は揺らがない」

強い意志の籠った瞳を、何処か遠くへ向けるユーリ。前口上を述べてみたものの、たとえ父が命を賭けて種を蒔いた、という事実が無くとも、自分が今、この時代にエスクードを建て直そうと思えば、自ずから歴史を壊していたとも思う。多少の使命感がないと言えば嘘になるが、多くは飽くまで自分の意志に依る物だ。出なければ、こうまでして再興を望みはしなかっただろう。確かに、そう思う。

「解りました。して——その第一歩はどの国と？」

「《ヴェール皇国》」

ああ、成る程、とベルマールが頷く。

《ヴェール皇国》——通称《麗国ヴェール》。エスクード王国の北東、そしてマズール王国の北方に位置する皇国である。領土自体はマズール王国に匹敵する広さを持つが、この半世紀程の間、戦を経験していない比較的平和な国である。麗国れいこくという通称は、ヴェール皇国の街並みに起因する。自然との共存を理念とした街作りの結果、瑞々しい青と緑に覆われ、さらに、ヴェール皇国の特産品である《ミール鉱石》と呼ばれる白香の鉱石によって統一された家々が調和し、美しい外観を誇る為である。この大陸——《エクシリア

大陸》の完全な西方部に位置するエスクード王国とマズール王国とは違い、領地の東端は半ば中央部という括りで考えられている。とはいえ、その領地の大半は西方国家という括りの中で存在し、また、北方中部の《ルシウル王国》——通称《聖法国家ルシウル》と外交的な同盟を組んでいるという噂もある国だ。現在の国家元首は《エンプィオネ・ヴェール》という若い女皇帝である。

ベルマールは先代ヴェール皇帝と、西方諸国の貿易会談時に相対した事が在った。大国の皇帝という割には気さくな人物であり、先代エスクード王と少し似ている所があったと過去の記憶を思い出した。彼が病で崩御した際に、先代エスクード王が直々に墓を訪れたのは記憶に新しい。高名な武人としての名も持つ彼の崩御を聞いて、如何に高名な武人と言えども、病には勝てないものか、と考えさせられたのも覚えている。

「ヴェール皇国と同盟を締結する事が出来れば、マズール王も易々とエスクードに手を出す事は出来ないだろう。準備が整うまでは、ヴェール女皇に牽制して貰うのが一つの上策だ」

「確かに。その一步は大きいですね。しかし問題も有ります——」

ユーリはベルマールの言葉に対し、直ぐに同意の頷きを見せ、同時に言葉を並べた。

「そう、問題は聖法国家ルシウルと同盟を結んでいるかどうか、だ」

聖法国家ルシウルは、マズール王国と同じく《ヴァンガード協定連合》に所属している国の一つだった。マズール王国の影に潜むヴァンガード協定連合によって滅ぼされたとも言えるエスクード王国としては、最も手を取りたくない国の一つである。もしヴェール皇国がルシウル王国と同盟を締結させている現状ならば、ユーリはヴェール皇国との同盟を諦めるつもりでいた。

「間接的にですら、俺はヴァンガード協定連合と手を組みたくはない」

ヴァンガード協定連合はエスクード王国との因縁が深い組織だった。その戦いの歴史は後々ユーリの口から明かされる事になる。最も記憶に新しい戦いの記憶が、レザール戦争である。独立国家を貫いたエスクード王国と、国家間の相違を取り消す事を理念とした連合組織ヴァンガードは、まさに対岸同士の存在だった。正反対である。

「まあ、実際に行って見なければ解らないよ。本から得た情報は、著者の個人的な感情で湾曲している事もある。俺の持つ情報にはレザール戦争前後の間に穴があるし。ベルマールさんやイゾルデもキールにずっと居たんだろう？ 《ミロワール運河》を隔てて北方に位置するヴェールの情報量は俺と似たような物だと思うけど——」

「確かに、あまり有用な情報は入ってきませんね。私はあくまで王の手足だったので。一応情報操作もされていたようですし。マズール王も文官としては良い手腕を持っていますからね。余り関わりの無い情報は与えまいとしていたのでしょうか」

「私も同じような物だな。浮世離れしていた事には変わりはない」

「——と言う事で、足を使って赴くしかない。どちらにせよ、面を合わせなければ同盟は結べない。仮に問題があるなら——あとはその場でなんとかする」

予想の範疇を出ない類の問題について、この場であれこれと議論するのは無駄な事だ。状況を知り得ねば、結果の出しようがない。

「再興への一步を踏んだと言うのに既に断崖絶壁に立たされているような気がしますね……」

ベルマールが苦笑しながらため息をついた。

確かに、とユーリが同じように苦笑しつつ応える。

「前代未聞の大盤振る舞いをしてやろうと言うんだ。この程度、まだ序の口さ」

確かな一步を踏み込んだ事に変わりはない。これから歩む道が、ただひたすらに険しかったただけだ。そう自分に言い聞かせ、ユーリは決意を胸に抱いた。

「ともあれ、私の仕事はこれで決まりましたね」

ユーリが具体的な何かを言っていた訳ではない。なのに、ベルマールは全てを見透かしているかのような視線でユーリを射抜きつつ、言葉を紡いだ。ユーリはその視線に真っ向から応え、一度頷く。

「ベルマールさんには、別働隊としての任務を与える。俺達が各国との同盟締結に走る間に、エスクード領へ戻り、散り散りになったエスクードの民を《王都セリオン》、また、周辺の街に集結させてくれ」

たとえユーリが各国との同盟を締結させ、自国へ戻ったとしても、その時にエスクードの民が散り散りでは意味が無かった。あくまで主体はエスクードの民にあるのだ。つまり所、ユーリが自国へ戻る事その物が、ある意味エスクード再興宣言となる。少なからず、エスクードの民はそれ知り、脈動するだろう。民全ての情報を統制し、外部へ漏れないよう抑える事など、出来る筈が無い。そうなれば、エスクード王族の王都帰還は瞬く間に各国へ広がり、そして――マズール王国はその時点で再び攻めてくるかもしれない。故に――

「また、集結させたエスクードの民に王都再興を促し、エスクード独自の軍事力と政治力を――国の機能を、俺が戻るまでに形にする事を命じる。可能ならば、『エルフ王』にも一報を伝えておいてくれ。『計画は完遂された。新たなエスクード王国に於ける、平等な権利を此処に譲渡する』――と」

ユーリが王都へ帰還した時に、国としての機能が十分に回復していなければ、焼け石に水、まるで意味が無い。攻め入れ、滅びる。

「しかと、心得ました。陛下――」

「正式に王位を継いだ訳じゃないんだけどな」

「エスクード王剣こそがエスクード王の証です。それに、新たなエスクードを導いて行けるのは貴方しか居りませんから」

「過大評価だよ。まあ、褒め言葉として受け取って置く事にしよう」

ユーリは照れ臭そうに頭を掻き、それをベルマールは悪戯気な表情で眺めた。そのままベルマールは視線を横に映し、漸く話す事が出来ますね、と切りだして、リリアーヌに言葉を投げかけていた。

対するリリアーヌは、ベルマールの顔を見て真正面から「死んでれば良かったのに」と呟いていた。

「そんな事言わないでリリちゃん。ほらほら、再会の抱擁でも――」
「寄るな変態っ」

ベルマールはリリアーヌをからかっているつもりなのだろうが、当のリリアーヌは割と真面目にベルマールを避けていた。在る理由から、リリアーヌはエスクード王族の元で生活していた為、ベルマールとも顔見知りだった。しかし彼女はベルマールが嫌いだった。本性を掴ませない飄々とした人柄、その上、リリアーヌに度々ちょ

っかいを出していたベルマール。口で応対しようにも、ベルマールの方が遥かに格上で、物理攻撃で反撃しようにも、それこそ掠りもせずに全て避けられる。一方的にからかわれるだけだった昔の記憶は、今も尚リリアーナの脳裏に残っていた。

対するベルマールの方は、当初はからかう事に別の意味も見出していた。しかし、繰り返している内にからかう事が習慣になってしまった為、後戻りできなくなったという感が強い。まあ、面白いから良いんですけどね、と内心で含み笑いを浮かべ、ベルマールはリリアーナの額を小突いた。

リリアーナは腕を振りまわして「離れろ変態っ」と罵倒するが、その罵倒は軽々とスルーされ、振りまわしている腕はまるでベルマールに当たらなかった。全てを全て、手で防いだり、身体を半身にしたりして回避する。その様子を横で見ていたユーリがうんざりしたような表情でベルマールに言った。

「ホント好きだよね、リリィをからかうの…」

「何でしょうね、自分でも身に付いた習慣に若干の恐怖を抱きますよ」

「そう言いつつも顔は笑ってるけどね…」

「おっと、これは失礼、真面目な表情と言う物が苦手な物で――」

その間にもリリアーナの額を小突き続けるベルマール。ユーリは面倒になって、リリアーナには少し悪いと思いつつも、それ以上関わる事をしなかった。愛情表現は人それぞれである、と無理やり自分に納得させつつ。



「決まったのならさっさと行け、ベルマール」

「冷たいですねえ、イゾルデ。私を労わるくらいの気を使えないん

ですか？ そんな事だからソフィア様にシャルを取られるんですよ？」

「貴様は本当に楽しそうにその話題を持ち出してくるな…」

「フッフ、弱みを見せた貴女が悪いのですよ」

イゾルデは怒りに頬を赤らめて握り拳を作り、震わせる。ベルマールはニヤニヤといつも通りの笑みを彼女に向けていた。

限られた時間しか残されていないと解れば、その日の内に動かざるを得なかった。特に、ユーリが帰還するまでのエスクード再興の役割を担っているベルマールは、一刻を争う様に宿を出、他の三人はそれを見送る様に、同様に宿の外へ出ていた。

「そういえば、忙しかったので伝えるのを忘れていましたが——」

近場の露店で旅用品を買い漁り、それを旅荷に詰め込みながら、ベルマールが思い付いた様に会話を切り出した。

「リリちゃんの『御兄様』がキールに宿泊しているようですよ。マズール王城でエルフの目撃情報を聞いたので、見に行ってみれば『殿下』でした。流石に私も性質の悪い冗談かと思いましたが——いやはや、結局の所、皆キールに集まってしまいましたねえ。考える事は同じなようで——」

何故そんな重要な事を忘れていたのか、とユーリは頭を抱えてベルマールに言う。ベルマールの事だからわざと隠していたのだろう、とも思うが、その伝え方が行き成り過ぎてユーリの思考は止まっていた。それはリリアーナも同様のようで、穏やかな顔のまま表情が停止している。大丈夫なのだろうか、なかなか見た事の無い滑稽な顔である。

「——なんでそんな大事な事をもっと早くに言わないの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「それはですね——極限まで驚いたりリリちゃんの顔を見たかったからに決まってるじゃないですか！」

そんな表情のまま口から吐き出される毒をまるで気にせず、言葉を返すベルマールの顔には満面の笑み。彼はそのまま遠くの一件の建物を指さし、続けて言葉を紡いだ。

「あの宿に匿っておいたので、足を運んでみるといいでしょう」

真っ先に動き出したのはリリアーナだった。ベルマールには眼もくれず、一目散に走り去る。別れの言葉など在于る訳もなく——

「フフ、リリちゃんはせっかちですねえ」

その後ろ姿を満足げに眺めながら、リリアーナが走り去った事を確認すると、ベルマールの表情が今までにない程真面目な物になる。

「さて——ユーリ、ヴァンガード協定連合には気を付けてください。近頃マズールに対する圧力が強いようでしたので、もしかしたら西国周辺にその手の者が駐在している可能性があります。国力が整わない内に貴方の存在がヴァンガードにバレれば何かしらの行動を起こしてくるかもしれません。イズルデと《殿下》が共に居るならば、それなりの抵抗は出来ると思いますが、無理は禁物ですよ」

「忠告覚えておこう。そっちも気をつけて。俺が戻るまでエスクードを任せる——」

「御意のままに」

ユーリも同様の面持ちで答える。

「それでは、本国にて——御待ちしております」

最後の最後は、やはり笑顔で。ベルマールはそう告げて踵を返した。それ以上の言葉は必要なかった。いずれエスクード王国で再び見^{まみ}えると確信しているからこそ、これ以上は必要ない。そう心に刻みつけ、ユーリはベルマールの背を見送るのだった。



リリアーナは息が上がるほどに全力で走った。ベルマールが指で示した宿の扉を思いっきり開ける。力の加減が出来なかった。ふと宿の中を見回すと、数々の部屋の扉が眼に入る。一々全てを開けるのは些か面倒である。とはいえ、宿の主人に『エルフが泊まっている部屋は何処か』と問う訳にも行かない。ベルマールの言葉が偽りで無いならば、自分の探し人はエルフである筈だった。そして、此処はマズールで、エルフは居ては成らない存在なのだから。そこで多少の冷静さを取り戻し——

「御主人様、宿泊者名簿を見せて頂けますか？ 入用で……幼い頃に別れた兄を探しておりますの……此処に宿泊していると旅のお方に教わりまして——」

御願います、と流麗な仕草の一礼を見せる。その後、目をうるうるさせながら渾身の上目遣いで宿の主人に懇願するような視線を向けた。本来ならエルフである自分が如何に可愛らしい演技をした所で、主人はエルフである事を知れば真っ先に騎士団を呼ぶだろう。しかし、今は左耳に視覚変化の効力をもたらし魔術装具を付けている。そのリリアーナの思惑通り、宿の主人はリリアーナの容姿に見惚れ、半ばその色香に惑わされたまま、「勿論ですよ、お嬢さ

ん」と言葉を紡ぎながら一冊の分厚い冊子を取りだし、リリアーナに渡した。

リリアーナは出来るだけ御淑やかさを失わないよう、優雅さを残した手元で冊子を捲って行く。その実、瞳は凄まじい早さで動いていたが、その事に店主が気付く事もなかった。

そしてリリアーナの眼に一つの名前が眼に入る。

「《イシュメル・カレヌ・リインミューレ》——二〇七号室……」

「お兄様の名前は見つかりましたか？」と主人が訊ねてくる。兄の本名を見つけ、一瞬たじろぐ。《リインミューレ》の性を主人に教えた所で、その名が『エルフの性』を指すとはまず解らないだろう。その名はエスクードの王族しか知らない。そう冷静に判断を下し、自分と言う存在から兄がエルフであると言う事、逆に、兄の名から自分がエルフであるという事はバレないだろうと確信する。

「はい……二〇七号室の宿泊者はまだ滞在しておりますか？」

「ああ、イシュメル様ですね。王国宰相ベルマール様から仰せつかっております。個人的な御客様という事で。何やら訳ありの御方のようなのですが、私の宿は『そういう御方』を泊める事を別段忌避してはいませんから。金さえ払って頂ければ、また、私共に危害を加えない限りは、私達は何も御訊ね致しません」

店主の宿自慢が始まる。

とはいえ、ベルマールも態々その宿泊者がエルフであるとは伝えていないだろう。

「まだ御部屋に居られると思いますよ」

「有り難う御座います。このご恩は忘れません——」

「いえいえ、私も御嬢様のお役に立てて光栄であります」

芝居掛かった一礼を主人が見せつける。それを眼の端に捉えつつ、リリアーナは宿の階段を上がって行った。二〇七というプレートが掲げられた部屋を見つける。

躊躇はなかった。

扉の取っ手を回し、押しこむ。

視界が開け、部屋の中で寛いでいた二人の人物の後ろ姿が眼に入った。いきなり扉が開いた事に驚いた様に、その二人は振り向く。

「《兄様》……！」

その顔を見間違う筈が無かった。リリアーナは固まったまま、声を発していた。部屋の中にいた人物の片方。リリアーナと同じ金系のような髪の毛を肩元で切り揃えている青年が、その大きな水色の眼を見開く。そして、透き通るような美声上げた。

「……《リリアーナ》？」

「兄様！」

リリアーナが勢いをつけて、その青年に抱きついた。

「あれ？　なんでリリアーナが此処に？　あ——」

戸惑う青年。しかし、自分が何故キールにいるのか、何故この場所に留まっているのかを直ぐに思い出し、言葉を紡いだ。

「ユーリも一緒だね？」

「うん！」

「ユーリは僕がこの部屋に居るって知ってる？」

「あ——」

「なら案内してあげなきゃ。リリアーナが此処に居ると言う事は、もうマズール王の前で一芝居打ってきた所だろう？　ベルマールさんから計画の事は聞いていたからね。ともかく、ユーリが今この宿の店主に長い事容姿を見られるのは不味いから。彼らの言う『不干渉』も何処までが本気か解らないからね。ほら、行っておいで——」

そう言ってリリアーナは興奮した様相を呈したまま、一度部屋を出て行った。

青年の隣にいた褐色の肌の女性が眼を丸めたまま訳が解らないといった表情で青年に訊ねる。

「どういう事なんだ？」

「何、直ぐに解るよ、《アガサ》」

青年は優しい微笑を浮かべたままそう返した。



「……俺もイゾルデもこれ以上容姿を見られるのは困るな……手軽に変装出来る魔術装具とかないの？」

「顔全体を視覚変化させる程の魔術装具がどれ程高値で取引されるか知っているか？　リリアーナにやった物でさえ、本来なら金貨三枚は下らない物だぞ……第一そんな手間の掛かる物を作るのも面倒だし、買い手も限られる故、手元にはない」

「一回目はワザと捕まるって目的があったから良いけど……マズール王の前で一芝居打ってきた後に再び捕まるってのは御免蒙りたいな……いくらなんでも間抜け過ぎる。マズール騎士が追跡の任に出ているかも知れないし……早くキールから出たい——」

近場の露店で急遽薄手のローブを購入し、そのフードを頭から被って頭髮と顔を隠す。イゾルデの黒い外套には元からフードがついて居た為、今はそれを被っているが、とはいえ、フードを目深に被った得体の知れぬ二人。悪い意味で、それなりに目立っていた。

「宿泊名簿でも主人に借りるか？」

「この格好で？　：絶対見せてくれないだろ：怪しすぎる：」

「ベルマールがまだ居れば良かったな：」

現状、マズール王都キールに至っては、ユーリとイゾルデは非常に動きづらい状態だった。ベルマールがエスクードへの旅路に着く時に、自分達もヴェールへの旅路に出ようと思っていたのだ。それが不意の言葉で後回しになっている。

「《イシュメル》の奴もなんで態々キールに来るかね：」

「お前が絶対に訪れると解る場所が此処だからな」

二人が宿の前で立ち往生していると、不意に宿の扉からリリアーヌが出てきて、二人に手招きをした。二人はほっとしたように彼女の指示に従い、宿の主人に凝視される前にそそくさと階段を上がって行く。リリアーヌの渾身の演技があった為、主人の方も深く関わるつもりはないように思えたが。

リリアーヌに案内されて彼女の後に宿の部屋へ入室する。そして

「やあ、遅かったじゃないか――《ユーリ》」

「《イシュメル》お前：エルフがキールに居る事がどんな事を指すか解っているのか？」

「解っているとも。だからそれなりの対策はしていたさ」

青年——イシュメルが自分の耳元を指さす。その左耳には、リリアーヌと同じようなピアスが括りつけられていた。そこでイシュメルが一度微笑を浮かべ、ユーリの前に立つ。背の高さはほぼ同じで、その事に感慨を受けながらイシュメルが言う。

「やっと追いついた。もう君にもやしっ子と蔑まれる事もなさそうだね？　——生きていてくれて嬉しいよ、ユーリ」

青年がユーリの肩を抱き、そのまま引き寄せる。青年の眼には涙が浮かんでいた。軽口を叩く口元は震えていて、先程までの微笑も崩れ——ユーリはその様子になんとなく気付いて、言い返そうとしていた皮肉を飲みこんだ。

「そして——リリアーヌ」

ユーリの肩を離すと、今度は隣でその様子を眺めていたリリアーヌの肩を抱き、同じように抱き寄せた。

「僕のたった一人の妹、君を辛い境遇に身を置かせてしまった僕を許してくれ——御帰り、リリアーヌ」

「兄様の所為じゃないよ。私は大丈夫——『ただいま』」

リリアーヌの眼にも涙が浮かぶ。

すると、青年の隣で頭の上に疑問符を浮かべていた褐色肌の女性が上ずった声で言った。

「いい加減にあたしにも説明して欲しいんだが……」

「説明するよ。余り時間も無いだろうから簡単にだけどね」

イシュメルがリリアーヌを解放し、彼女に優しい笑みを向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0303y/>

ノスタルジア・エンドロール——亡国再興記——【改訂版】

2011年11月4日06時09分発行